
IS～インフィニット・ストラトス～ 壊すものと守るもの

オーズ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS（インフィニット・ストラトス） 壊すものと守るもの

【Nコード】

N4718T

【作者名】

オーズ

【あらすじ】

両親に捨てられた少年・織斑唯。

さまざまな力と知識を身につけ、世界で唯一ISを操れる男になった。

しかし、唯には秘密があった。

果たして唯は何をされたのか・・・。

唯の目に映るのはいったい何か・・・？

この小説は原作ブレイクは当たり前です。

他のゲームやアニメの技、平成ライダーの敵などを多く取り入れる
予定ですので嫌なら即戻るをクリック！

ヒロインたちがコンボソングを歌います！！

なんと！！お気に入り100件達成！！

ありがとうございます！！

キーワードちょっと変更しました。

現在第三章突入！

プロローグ（ちよい修正）（前書き）

衝動的に思いついた作品です。

プロローグ（ちよい修正）

おれは両親に売られた・・・。

姉たちは何も知らされず死んだと思い込んだ・・・。

どこにあるかわからない大きな病院で人体実験を施され、一瞬の隙をついて逃げた。

世界、そしてこの世のすべてに絶望した瞬間、手を差し伸べてくれたのは・・・。

「にゃ？ ゆいにゃんだ〜。」

「・・・あ？ おれをその名前で呼ぶのは・・・。」

不思議の国のアリスを地で行く絶賛行方不明中の幼馴染の姉だった・・・。

その人物・束の下で半年の療養生活を送り、回復後は超能力のコントロール、ISの知識・開発、コアの製造方法、病院から奪ったデータのGNドライブの製造（コピーはとっておらず、このデータしかない。さらに開発にかかわった人物をすべて殺した。2基だけ作り、データは抹消。）、専用ISの製造、肉体鍛錬、さまざまなことをやった。

数年後

そして今おれはある人物の依頼によりある場所に来ている。

その依頼とは親友の妹の奪還の手助けというものだ。

中にいた怪しい人物をすべて気絶させ、あるひとつの扉の前に立っていた。

「ここか・・・。」

少年は目を閉じ、右手を前に出し力を集め、頭の中でトリガーを引く。

「はぁ！」

ドゴン！

あの病院で身につけた超能力のひとつ・衝撃波を放つ。
ドアが吹き飛び、そこにいたのは少女だった。

「大丈夫か？」

「う、うん・・・。」

少女は少年がつけているバイザーで顔がよく見えなかった。
美しく光る黒い髪は長く、腰ぐらいにまで伸びている。

「あと少ししたらお姉ちゃんがくる。」

「お姉ちゃんが・・・？でも、今日は決勝戦・・・。」

少年は少女の頭をなで、穏やかな声で話し始める。

「心配するな。どんな人間でも家族を見捨てるようなやつはいない。
だからきつと来る。」

「うん！」

「さて、後は・・・来たか。」

足音が聞こえ、少年はドアに向かうが少女が呼び止める。

「あ、待って！お兄ちゃんのお名前はなんていうの？」

少年は少女のほうを向かずにこういった。

「・・・唯だ。またどこかで会おう。・・・一夏。」

最後のほうは小さくて聞き取れなかった少女・・・一夏。
唯と名乗った少年はその場を去る。

「唯・・・。」

ポツリとつぶやく一夏。
そこに・・・。

「無事か!？」

「千冬おねえちゃん! うわーん!」

姉である千冬が一夏に抱きつく。

一夏は安堵から泣き出す。

「よかった・・・。いったい誰が見張りを・・・?」

「唯っていう人が助けてくれたの。」

唯という名前を聞き千冬は驚く。

「唯・・・だと? 一夏、もう少ししたらドイツの人たちが来る。それ
までここで待っている!」

「え? あ、お姉ちゃん!」

千冬は一夏をその場に残し後を追う。

施設の外

外に出た唯は依頼主と連絡を取っていた。

「一夏は無事だ。束。」

『そっか。いっくんが無事で何より。んじゃ、早く帰ってきてね。』

「了解。ミッションコンプリート。これより帰還する。・・・!?」

唯はISを展開しようとするが気配を感じ後ろを振り向く。

そこには千冬がたっていた。

「何のようだ？ブリュンヒルデ。」

「な～に、妹を助けてくれた恩人に一言お礼を言いたくてな。あと、私をその名前で呼ぶな。織斑千冬と呼べ。」

「・・・わかった。それと気にするな。おれは依頼主の依頼であんたがスムーズに動けるようにサポートしただけだ・・・。」

「それでもだ・・・話は変わるがお前に聞きたいことがある。」

（空気が変わった・・・これがブリュンヒルデのオーラか・・・。）

その言葉を発した瞬間、千冬の空気が変わる。

普通の人ならばプレッシャーに飲み込まれるが唯は特に気にしていなかった。

「何だ？聞きたいことは。」

「お前・・・唯か？」

「・・・なぜそんなことを聞く？」

「お前なら知っていると思っとな、何年か前に行方不明・・・いや、死亡扱いになった私たちの弟のことを・・・。」

「知ってどうする？」

「何か知っているのなら・・・力づくで聞き出すまで！」

千冬は襲い来るが唯は冷静に攻撃を回避。

（相手は生身・・・こっちはISを展開している・・・ならこちらが有利だ！）

（と思っているのだろうか・・・そうはいかないな。）

唯は攻撃を回避した後ミドルキックを放つが受け止められ、しばらく白熱した展開が続いていたが千冬が振り下ろした剣がバイザーにあたる。

バイザーが割れ、素顔が明らかになる。

「唯・・・！どうして・・・！」

「！チィ！来い！黒百合！」

千冬は呆然となる。

死亡扱いされた弟が目の前にいるのだから。

素顔を見られた唯は専用IS・黒百合を展開。

闇のように黒いISをまとった唯の姿を見て千冬は驚く。

「何・・・！男なのにISを起動したと・・・！？」

「悪いな！ブリュンヒルデ！こっちも依頼人に任務完了の報告に行かなきゃ行けないんだ！」

飛翔すると同時に両肘につけられたGNドライブが粒子を放出。

黒と緑の美しいコントラスト。

あっという間に姿が見えなくなる。

その様子を見ていた千冬は・・・。

「きれいだ・・・」

とつぶやいていた。

それと同時に疑問が浮かび上がる。

（唯・・・いなくなってからいったいお前に何があった・・・。なぜお前がISを持っている・・・？なぜISを動かせるんだ・・・？）

その疑問に答えるものは誰もいない・・・。

千冬が見上げた空は満月が美しく輝いていた・・・。

この事件から数年後、姉弟は再会する・・・。

プロローグ(ちよい修正) (後書き)

次は主人公とIS紹介・・・もしくは学園入学かな？

人物・IS紹介(随時更新)・大三章OP・EDテーマ追加(前書き)

人物とISの紹介です。

人物・IS紹介（随時更新）・大三章OP・EDテーマ追加

人物紹介

織斑唯

年齢・・15歳（一夏とは双子で弟）

身長・・179cm

体重・・64kg

髪・・腰ぐらいまで伸びる美しい黒

瞳・・黒（左）金（右）

性格・・冷静だが熱い情熱を内に秘めている。仲間を見捨てること
ができない。

一夏たちに内緒にしているが心に闇を抱えており心の闇が晴れる日
が来るのか・・・。

特徴・・基本的に苗字で呼ぶ。一度唯と戦い、唯が気に入ったもの
に関しては名前で呼ぶ。

人体実験を施された影響で右の目が金色に変わってしまった。

その間ずっと一人ぼっちだったため孤独になることと人体改造で人
間ではなくなってしまうことに恐怖を抱いている。

これが心の闇を作っている原因。

好き・・仲間と過ごす時間、読書、ラノベ和食

嫌い・・孤独、男を見下す女、人を道具として扱うもの

超能力

病院で薬を打たれ発現した能力。

メラトロピン以外殺傷能力が極めて高く、現在では使っていない。

ナルコン
衝撃波・・前方に精神エネルギーを放ち相手を吹き飛ばす。

レッド
発火能力・・分子を高速振動させて発火させる。いわゆるパイロキネシス。

メラトロピン・・物品や思念などから情報を得るサイコメトリーや、物質に干渉するテレキネシスを発現する。

両親に売り渡され、大きな病院（ミケランジェロ記念病院）で薬、人体実験の日々を送っていたがあるときを境に脱走。

さまざまな妨害にあいつつ、辛くも脱走に成功するがそのことで自分が人間ではなくなってしまったことに絶望を抱くがたまたま束と出会い、保護される。

奇跡的に後遺症もなく完全回復、束からISの知識を学ぶ。

わずか2ヶ月で完全に習得。（このときの束いわく、「束さんを超える天才だね」といっている。）

その後、病院で盗んだデータからGNDドライブを製造したのはいいがこれが表に出たら世界のバランスが大きく変わると予測し2基十予備に何機か製造後データを破棄、世界でたった一つしかないツインドライブシステムを搭載した専用IS・黒百合を製造。

製造後は傭兵として世界各地をめぐり、一夏誘拐事件で千冬と再会するも満足な会話を交わさずにその場を去る。

ある遺跡で石化状態のオーズドライバーとコアメダルが収められた

メダルホルダーを見つける。

人体改造された影響からか身体能力が異常に高い。

銃火器の扱いにも長けておりノールックシュート、リフレクショットが得意で剣術も超一流。

束からの依頼で束とともにIS学園に入学することが決定している。

（束は講師。）

交友関係は広く、ハヤブサの名を持つハッカー等々ある業界で有名な人たちとも知り合い。

現在のお気に入りのはラノベは緋弾のアリア。

ゲームやラノベ、アニメから気に入ったセリフや技を言ったり取り入れたりする。

自身が女の子っぽい顔であることを自覚しており女装する事に抵抗がない。

専用IS・黒百合

搭乗者・織斑唯

世代・計測不能

唯が作った世界で唯一のGNドライブ搭載機で機体色は黒。

プロローグでは肘についていたが腕のハードポイントの問題で両肩のスライド式シールドに装着。

全身にスラスターを装着したことで圧倒的な機動力をほこる。

顔を除く全身装甲タイプ。

武装

影縫い・・・刃渡り長めの日本刀。メイン武装その1。

不知火・・刃渡り短めの日本刀。メイン武装その2。

GNビームショットライフル・・ライフルモードとショットガンモードに切り替え可能なビームライフル。メイン武装その3。

GNビームサーベル・・腰にマウントされているビームサーベル。

GNビームピストル2・・威力は低めだが小回りの効くビームピストル。

GNビームマグナム・・専用のEパックを使用する。掠るだけでもシールドエネルギーを削るが1パック5発、予備カートリッジ3つしか持てない。威力の調整が可能で一回の射撃で五発分の威力を出したり威力を落として連射したり（最大五連射）できる。

GNビームガトリング・・威力は低いが圧倒的な連射性能を誇るビームガトリング。

GNツインバスターライフル・・黒百合最大の威力を持つライフル。トランザムと併用することで圧倒的威力を誇るが最大出力で3回連続で放つとISが強制解除された上でダメージの反動が帰ってくる諸刃の剣。

GNフィンファンネル・・背中のファンネルラックに収納されている折りたたみ式ビット兵器。威力、展開速度、展開しながら攻撃ができると現行のBT兵器を大きく上回る性能を持つ。5基を組み合わせることで実弾、レーザーを防ぐことができるバリアを展開できる。両肩にもドライブ直結のファンネルラックが存在しており、こちらに収納すればすばやい回復が可能。

ファンネルラックを収納すればフィンファンネルも一緒に収納され

る。

GNメガキャノン・ツインバスターライフルよりも威力は劣るが威力の調節が効き、威力を落とせば連射が可能。

GNソード?・グリップを持ちかえることでソードモード、ライフルモードの切り替えができる。グリップ同士を接続する事でツインランスモードにもなる。

切れ味は抜群で並みのシールドなら4分の1ぐらい削れる。

エリーゼ・カスタムメイドの二丁のハンドガン。通常のハンドガンより威力、連射力が高く通常のカートリッジでの使用ができる。名前の由来は神室町の孤高の金融屋の使用していたハンドガンの名前をもらった。

単一能力

トランザムシステム・5分だけスペックを3倍以上に引き上げる。時間が過ぎると機体性能が著しく低下。システムを発動すれば機体が赤く発光。

トランザムバースト・唯の仲間を守りたいという意志に黒百合が答え発現。唯が仲間と認めているISのシールドエネルギーを全回復。トランザム状態で使用可能だが発動条件は唯自身にもよくわかっていない。

OPテーマ・Realize (玉置成実・ガンダムSEEDのOPテーマ・第一章)・Justice to Believe (水樹奈々・ワイルドアームズ・ザ・ファイフスバンガードOPテーマ・第二章)・オルタナティブ (Angela・アスラクライン2・O

Pテーマ)

EDテーマ・Reason(玉置成実・ガンダムSEEDDESTINYのEDテーマ・第一章&第二章EDテーマ)・Separation(Angela・蒼窮のファフナー・EDテーマ・第三章)

イメージキャラ・星空にかかる橋の酒井陽菜

人物・IS紹介(随時更新)・大三章OP・EDテーマ追加(後書き)

こんな感じになりました。

またかわっていくと思います

唯、IS学園に降臨する（正しくは降って来たとも言う・・・。）（前書き）

投稿です。

唯、IS学園に降臨する（正しくは降ってきたとも言う・・・。）

一夏誘拐事件から数年が過ぎた。

その間いろいろあった。

そう、いろいろ。

どこかの国

「はあ！？どういことだよそれ！？」

唯は任務を終え帰ってくるなり次の依頼に目を通すと信じられないことが書いてあった。

その依頼は・・・。

「なんでIS学園に入学しなきゃいけないんだよ！しかも束と愛琉も一緒だし！」

唯がIS学園に入学、愛琉とともに束、一夏たちの護衛というもの。しかも唯が男でありながらISを起動できるという声明も出した後だった。

「ゆいにゃんも学校っていうものを知らなきゃいけないでしょ？それに、いっくんと箒ちゃんたちも守なきゃいけないし。それに・・・。」

束はいつものふざけた表情から真剣な表情に変わる。

「ゆいにゃんを実験したやつらもまだ全員見つかってないんでしょ？もしやつらがコソ泥ユースレイと組んだりしたら・・・。」

「・・・たしかにそうだな。IS学園にいつて些細な情報もほしい。あそこは一応最先端技術の固まりだからな。」

こうなった以上、束に何を言っても無駄だと保護されてから一緒に住んでわかった。

千冬の苦勞が垣間見えた瞬間でもあった。

「はぁ。わかった。で、愛琉の立ち位置は？」

唯は青を基調とした服を着こなした少女に眼を向ける。

その少女の雰囲気は年不相応で大人っぽく、スタイルも抜群にいい。

「いるちゃんは生徒さんで束さんは講師。」

「後は政府に交渉材料に提出するISとかか。・・・汎用性の利くISの提出とビーム兵器の開発理論でいいだろ。あれは俺にしか作れない代物だから。」

「それでいいんじゃないかしら？」

愛琉はフフと笑い唯は設計図を書き始める。

「よし、それじゃはじめるか。」

そういつて唯はキーボードで次々データを打ち込んでいく。

「初心者向けでそれなりに機動力があって応用の利きそうなもの・・・。やっぱりM1アストレイでいこう。アストレイ専用のビームライフルとビームサーベル・・・。専用の小型ジェネレーターを設置して解決できる・・・。ビーム兵器以外の武器のほうは打鉄とラファールで流用できるようにしておこう。後はビーム開発の理論・・・。」

思考の渦に入り込み真剣な表情で画面を見る唯を見て束と愛琉は顔を赤く染めていた。

数時間後・・・。

「・・・よし。できた。後はデータを政府に送れば終わりだな。束、いつ行けばいいんだ？」

「今から！」

「「・・・は？」」

束の言葉に唯と愛琉が間抜けな声を上げる。と同時に地響きが起こる。

「んじやいっくよー！」

「うわわ・・・ってロケットかよ！これ！」

なんと簡易研究所が飛び上がったのだ。

IS学園

一夏サイド

はじめまして、織斑一夏です。

あの誘拐事件後、千冬姉から弟である唯が生きていたことを知り涙しました。

私はあの時の悔しさをばねにISの勉強に励み日本代表候補生に上り詰めることができました。

最近幼馴染の箒の姉であり私の専用IS・白式の開発者であり、ISの生みの親でもある束さんが声明を発表しました。

なんと、唯が男の子でありながらISを起動できるというものでし

た。

どうして唯が・・・？

そんなことを考えているとクラス代表を決める選挙が始まりました。

一夏 SIDE OUT

千冬がクラス代表を決めるため声を上げる。

「誰か立候補はいないか？自薦他薦、明日来る予定の転校生でもかまわんぞ。」

「私は織斑さんを推薦します！」

「わたしも。」

「私は転校生が来てからにします。」

「ならば織斑、転校生。この2人で締め切るぞ。」

千冬が締めようとしたとき、金髪ロールの女子・セシリアが口を開く。

「待ってください！弱い者を代表など、頭が悪いとしか考えられませんわ。大方転入生もそのメス猿と同じように頭が悪いのですでしょう！」

一夏は感じた。

悪寒がすると。

主に頭の後ろから。

ゆっくりと振り向くと、千冬が身内にしか分からない怒りの表情をしていた。

「オルコット、そう言うのなら転入生を倒せるんだな？」

千冬が静かに口を開いた。

その言葉にセシリアは、少したじろぐが「ええ!! もちろんですわ!!」と言った。

千冬は口を釣り上げた。

「そうか。・・ならお前はそれまでというわけだな。」

「どういう事です?」

セシリアは千冬の言葉を理解する事はできなかった。

全員そうだ。

その言葉に含まれる意味など、千冬にしか知るよしはない。

「なに、転入生と臨時職員の待遇を少しある物達と照らし合わせただけさ・・・。」

つまり、千冬は転入生達を知っているという事だ。

(どういふことなのかな?)

全員が不思議そうな顔をする中、千冬はセシリアを睨む。

「お前のISは死んだ。お前はあいつに瞬間的に負け本気を出せぬまま地に叩き落とされ、ISは完全破壊されと言ったのだ。それも赤子の手を捻るかのような感じで、な。」

その言葉に教室にいる物達が哑然とした。

その声には、怒気が含まれていた。

一夏は久しぶりに見る、姉に恐怖した。

唯一セシリアだけは、意味を正しく理解し反論した。

「そんな訳あり得ませんわ!!」

「なるほどな。それじゃあ、今から試してみるか？」

「いいですわ、どうせ雑魚なのでしょう!?!?!」

千冬は口を開こうとしたとき、言葉は遮られた。

セシリアがその言葉に、反射的に答えてしまった。

廊下からの声に。

「弱い奴ほどよく吠えるんだよね。」

「まあ、今の時代だとそう思っても仕方がない……。だが相手の力量もわからずに吠えるのは二流・いや、三流以下だな。」

「本当ね。その過信が身を滅ぼすことになるのに。」

そこには絶賛指名手配中の天才科学者、話題の男子生徒、すごくスタイルのいい女子生徒が半眼で立っていたのだから。

「やあやあ。ちゅちゃんにいっくん。箒ちゃんもお久だね。急いできたよ。」

「おかげでこっちは疲れたけどな……」

「まったくね……」

そう言ってアリス服の女性は顔を笑顔にし男子生徒と女子生徒は疲れた表情を見せる。

3人はつい先ほど学園から離れた場所に到着（墜落?）してそのままこちらに来た。

知らない人の登場で教室はさらに混乱し始める。

薄紫髪のウサミミを付けたアリス服の女性と、元の制服に赤のラインが入った改造制服を着た黒髪の男子生徒と女子の青のラインが入った改造制服を着た女子生徒がいたのだから。

一夏と箒は見間違えなかった。

(あ・・・)

自分を助けてくれた英雄^{ヒーロー}であり、ずっと会いたかった弟・・そして初恋の相手と会えたのだから。

全員の視線が、一夏と箒に向けられる。

その目が「誰？」と聞いていた。

「・・オルコット座れ・・。」

その言葉に、混乱していたセシリアは素直に従った。

「・・予定が早まった・・、臨時職員と転校生2名だ・・。」

そう言って名前がモニターに浮かぶ。

「「「「「え!?!」」」」」

そこには、ISの開発者であり絶賛行方不明中の篠ノ之東と世界で唯一ISを操れる男・織斑唯、IS適正ランクA・水樹愛琉と出ていたのだから。

東の名前と唯の名前を見た瞬間、教室は混沌の極みになる。

なぜここにくることになったのか唯が簡単に説明する。

政府との取引。

IS学園に入るため、開発したISのデータ収集の許可と新型ISの無償提供とビーム兵器開発理論。

この提示を見たとき、政府はすぐにOKした。

IS学園への転入を許可するだけで新型ISの無償提供とレーザー兵器を超えるビーム兵器の開発理論が手に入るのだ。

唯にしたらM1アストレイは黒百合に比べてはるかに簡単に製作できるもの。

さらに唯は今秘密裏にハイパーデュートリオンの開発に取り組んでいる。

これが完成すればランザム後の性能低下の欠点を克服できる。

ともかく、束にしてみたらお尋ね者から開放され肩の荷が下りたところか。

「織斑、水樹・・・自己紹介しろ。」

「わかったわ。・・・私は水樹愛琉。よろしくね。」

「次は俺だな。知っていると思うが世界で唯一ISを操れる男・・・織斑唯だ。織斑教諭とそこにいる一夏の弟だ。こんな容姿だが男だ。よろしく。」

「私は天才の束さんだよ。ハロー。ここには臨時教員としてきました。以上、終わり。プギュー!？」

唯は束の頭をしばく。

そして生徒のほうに向き直る。

「すまないな。こいつによく聞いて聞かせるから。こいつは筋金入りの他人嫌いだな。これでも少しはマシになったほうなんだ。」

「・・・まあ、そういうことだ。」

「さて、自己紹介も済んだところで・・・俺に勝てるっていったやつはどいつだ。」

「私ですわ。」

その言葉にセシリアは立ち上がる。

「ほお・・・。」

「へえ・・・。」

まるでセシリアを品定めするかのような視線。
次の言葉は・・・。

「この程度じゃ俺に勝つどころか愛琉にも勝てない。」

「確かにそうね。私も負ける気がしないわ。」

「うんうん。その程度の実力でゆいにゃんといえるちゃんに勝てると思うなんておめでたいね。」

唯と愛琉と束はセシリアをあざ笑うかのように言った。

セシリアはついに限界を超えたのか、大声で「決闘ですわ!!」と叫んだ。

クラス全体が、驚いただろう。

「ま、いいけど。教諭、俺IS使わないから。」

「・・・いいだろう。」

まさかのISを使わない宣言。

実際に手合わせした千冬はこれを許可する。

セシリアは当然・・・。

「あなた！私を侮辱してますの!？」

「言っとくが、ISを展開したらすぐに終わってしまう。せつかく見せ場を作ってやろうとしてるんだ。」

「~~~~!! 私を侮辱したこと後悔することね!!」

ついにIS学園に降り立った（降ってきた？）唯。

隣にいる美少女・水樹愛琉とはいったい何者なのか？

アリーナで唯の実力が明らかになりその姿を見て一夏、箒は何を思うのか・・・。

唯、概念を覆し愚かな幻想を砕く（ある意味スタイリッシュ？）そう思ったなら
なぜこうなった・・・。

最初から人間離れしているといったが・・・まさかここまでとは・・・。

唯、概念を覆し愚かな幻想を砕く（ある意味スタイリッシュ？そう思ったなら作

アリーナ

山田先生がアリーナ使用の許可申請を行ったのだが、案外早く許可が下りた。

なぜならさすがにこんなに早くアリーナを使うクラスはなく、さらに訓練機が使用不可。

それですんなりと申請が通ったのだ。

上空ではセシリアが自身の専用IS・ブルーティアーズを展開して待っている。

地上では一夏と箒が唯に近づいて話をしている。

「唯・・・本当に大丈夫なの・・・？」

「ああ、相手はISだ。ただではすまないぞ。」

唯は二人とも本気で心配しているのがよくわかる。

唯は見るものを魅了する笑みを浮かべ二人に言う。

「ああ、あの凝り固まった考えを持っているお嬢様と女性が強いと信じて疑わない愚かな幻想を抱いた女子に見せ付けてやるチャンスだ。」

「・・・気をつけてね。」

これ以上何を言っても無駄だと判断したのか二人は唯から離れる。
一夏と箒は唯に対して・・・。

（唯・・・あなたにいったい何があったの・・・？どうして目が金色に変わっているの・・・？）

（それにあの雰囲気・・・ちょっとやそつとじゃ身につかないものだ・
・。）

二人は離れてから唯にいったい何があったのかと疑問を抱く。

そうこうしているうちに千冬から「織斑弟は行動不能、もしくは降
伏。オルコットはシールドエネルギー0、もしくは織斑弟と同じく
行動不能、降伏。」と勝利条件を言った。

生身の人間にISには勝てない。

クラス全員は本当にそう思っていた。

男が女に勝てないという事実が覆されるということにまったく気づ
いていなかった。

「試合開始!!」

だが、千冬の開始合図で戦闘は始まってしまった。

せめて何事もない様にと祈るだけ。

そのような視線で皆、唯を見ていた。

「火傷で済ましてさしあげますわっ!!」

そう言うと、セシリアはライフルを向ける。

威力を抑えているという事だろう。

セシリアの人としての安全な部分が見えた瞬間だった。

「さあ、踊りなさい。この私のブルーティアーズが奏でる円舞曲^{ワルツ}
で!!」

そう言ってトリガーを引く。

誰もが直撃だと思い、目をそらした。

「ふん……。ワルツね……」

だが、唯は身体を傾ける事でそれを避けた。

「当たってやるわけにはいかない。それともイギリスの代表候補生というのはこの程度の実力しかないということか？」

そう言って挑発する。

セシリアは驚愕した。

普通なら、恐怖で動けるはずもない。

攻撃は直撃するはずなのだ。

（たまたまですわ……。）

そう思いもう一度、引き金を引く。

「遅いな。」

また避けられる。

生身の人間が、ISの攻撃を……。しかもレーザーを避けるのだ。

誰もが驚愕した。

唯の後ろで、レーザーにより風で舞いあがる砂。

「これだけか？」

その目は、酷く冷ややかで……。
・・恐ろしく禍々しい目だった。

「だとしたらつまらんな・・。さっさとその背中にある翼っぽいものを使ったらどうだ？もしかしたら当たるかもしれないぞ？」

唯は皮肉と挑発の意味を込めて言う。

その言葉にセシリアは怒りの表情を見せる。

「行きなさい！！」

そう言うのと背部にマウントされていた、翼のようなものをパージした。

それらは各個意思をもち、アリーナを飛んだ。

ビット型の兵器・・その名称はブルー・ティアーズ。

機体名称と同じ事から、その機体の特徴とも思われる兵器だ。

セシリアを少し見る。

してやったりと言う顔だ。

だが、唯は全く驚きもせずに唯の中にいるもうひとつの人格と会話を交わす。

（ねえねえ、ボクもやりたいな。・・あのしてやっつたりの表情を恐怖で歪ませたいんだ♪）

（もう少し待て。・・代わったらほどほどにして置けよ？）

（わかってるって♪）

唯のもうひとつの人格の言葉が終わったのがきっかけか、ブルー・ティアーズがレーザーを発射する。

「・・・。」

身体を回転させ、その場から身体をずらす。
レーザーは空を切る。

だが、逃がさないといわんばかりに唯を追撃する。

二基で攻撃。

三基で攻撃。

四基で攻撃。

四基全てで波状攻撃。

そのどれもが、見る者全ての目を奪うような美しい動きで回避する。
どの攻撃も完全に当たらない。

動く事で唯の美しく光る黒の髪の毛が跳ねたり回ったりして、その回避を幻想的なまでに美化していた。

観客席のクラス全員が啞然とする。

一夏も筈も、教員である山田まで啞然とした。

アリーナに映る光景は、自身が思っていた価値観を覆すようなこと
だったのだから。

その様子を見ていた愛琉と束は・・・。

「うーん、美しいねー。ゆいにゃんの動き。あれ編集して売ればお
金になるねー♪」

「そうね・・・束、そろそろあの子が出てくるわ。」

「うんうん、ゆいにゃんのテンションもいい感じにあがってきてる
みたいだしねー☆」

千冬はその言葉に疑問を抱く。

（あの子・・・？ いったい何のことだ？）

管制室でこんな会話が展開されているころ、唯の動きに変化が起こ

る。

（・・・来る！）

唯はレーザーを回避すると同時にもうひとつの人格と会話を行う。

（ねえねえ、もういいでしょ？）

（ああ、いい感じにテンションがあがった。このまま俺がやっても勝てるが・・・ユリに任せる。）

（オッケー♪）

すると唯の動きが大きく変わる。

（来たね・・・）

（来たわね・・・）

束と愛琉以外は気づいていないだろう。

唯の黒目が赤目に変わったことを・・・

レーザーの波状攻撃はしばらく続いたが唯（？）はそのすべてを回避していた。

「アハハ！楽しすぎて狂っちゃいそうだよ！！」

そう言って近くにある、観客席の壁に向かって走る。

（っ！？　悪あがきをっ！！）

セシリアはそう思いながら、ブルー・ティアーズでそれを追う。だが、セシリアは気づいていない。

唯（？）の走るスピードが圧倒的に速くなっていることに。

やがて唯(?)は壁に近づき逃げ場がなくなった。
そう思ったセシリアは己の想像を覆される。

「なっ!?!」

「はぁ!」

唯(?)が走った勢いそのままに高く飛び、壁をけってブルー・テ
ィアーズに飛び乗る。

「よいしょっと!」

それを踏み台にして、近くにあるブルー・ティアーズに飛び移る。
さらに同じ行動を繰り返し、最後の一基を強く蹴ると空中に止まっ
ている、セシリアのライフルの上に立った。

その姿に、全員が驚愕し見惚れた。

美しくなびく黒い髪・・・。

だが、その目はひどく獰猛でまるでジャッジメントのようだった。

そして唯(?)はセシリアを笑顔で見下ろす。

「アハハ、さっき振りだね♪」

「あ、ああ・・・。」

セシリアは恐怖で唯の目と性格が先ほどまでとは違うことにまっ
く気づいていない。

セシリアは訳がわからなかった。

目の前にいる男はなぜライフルの上に立っている?

目の前にいる男は生身で自分はISを展開して絶対有利のはずなの
になぜ攻撃が一撃も当たらない?

怖い怖い・・。

セシリアは今、恐怖という感情に包まれていた。

そんなセシリアをわかっているかどうかは知らない唯（？）が口を開く。

「さて、お祈りは済ませたかな？・・行くよ！」

そう言っただけ（？）はライフルから飛び降り、なんと空中であるにもかかわらずパンチやキックといったラッシュ攻撃（参考・デビルメイクライ4のエキドナ戦のドーム状になって種・キメラシードを生み出す場所へのバスター。）を仕掛けたのだ。（顔は殴ってないよ。）

その光景に愛琉と束以外の全員が啞然となる。

普通なら人間は重力に従って落下するはずなのに唯（？）は少しずつ落下しながらもラッシュ攻撃を行っている。

「ふはっ！」

「キヤアアアアアアアー！！！」

唯（？）のラッシュ攻撃に恐怖したセシリアは操縦を忘れ I S は落下していく。

唯（？）はそれを察知してかフィニッシュの体制に入る。

「そろそろ危ないかな……。これでフィニッシュ！」

締めにはサマーソルトを繰り出し、反動で近くにあったブルーティア

ーズに着地。

操縦を忘れたISは重力に従い、地上に落ちる。

全員が目を見開いた。

地上に落ちた瞬間、大きな土煙を上げ姿が見えなくなる。

全員が、戦闘の行方を不安に思った。

そして土煙が晴れた。

「「「!？」」」」

そこには青いISを纏ったセシリアが関節技を決められていた。

唯(?)は一瞬のうちにセシリアのもとへ向かい、関節技を決めていたのだ。

「う、うう・・・。」

セシリアは苦しそうに手を動かすが、唯(?)に触れる事が出来ない。

何度も何度も手を動かすが、思うように動かない。

4基のブルー・ティーズも、操縦者が意識を飛ばさないため地面に落ちていた。

「アハハ、誰がボクに勝てるの?教えてよ。ねえ。」

唯(?)の無邪気なその声が、アリーナに響く。

大きな声ではないのだが、静かすぎるアリーナには十分響いた。
一夏と筈と千冬は唯(?)に違和感を覚える。

(あれ・・・?唯のしゃべり方・・・)
(さっきとは違うな・・・)

束と愛琉は一夏と箒を見て感心する。

「へえー。ちゅちゃんはともかく、いっくんと箒ちゃん。ユリちゃんに気づいたみたいだね。」

「幼馴染は伊達じゃない・・・というところかしら？」

こんな会話が繰り広げられている間、セシリアは眼の端から涙を流した。

未だ手は動くが、恐怖で足は動いていない。

「そこまでっ!!」

千冬の声がアリーナに響く。

セシリアの精神が崩壊する寸前、まさにベストタイミングだ。

千冬の声聞いた唯(?)は・・・。

(ほら、試合終了だ。外してやれ。)

(はーい♪ま、絶望に染まっていたいい表情を見せてもらったしね♪)

唯(?)はセシリアの首から手を離す。

赤目から黒目へと代わる。

セシリアは地面に倒れ込むと、意識を失った。

「オルコット戦闘不能。 勝者、織斑唯!!」

アリーナに試合終了の合図が響く。

唯は管制室のほうに向き直って言う。

「教諭、オルコットを保健室に運ぶ。」

「いいだろう、許可する。」

千冬に許可をもらった唯は気絶しているセシリアをおんぶして保健室に向かう。

アリーナは未だ先の戦闘光景から抜け出せないでいた。

生身の人間が・・それも男が、武器も何も使わずISに勝ったのだ。夢だと思いたいのだろう。

誰も動こうとしない。

否、動けない。

もちろんその中には一夏や箒の存在も入る。

管制室でその光景を見ている千冬と束と愛琉は、少し口を釣り上げていた。

女尊男卑が当たり前だと思っている者たちには、いい刺激だろう。

所詮ISを動かせる女のみが上に立っていて、ISを使えない男は下だ。

そう言う愚かな概念を誰もが持っている。

ISの恩恵を受けている女たちは、自身の立場を全く理解していない。

ISが無ければ男も女も関係なくただの弱い生物だという事に。

自然とISは人間より上にある物として、全ての者に見られるのだ。だがISを使わなくてもISを倒す事が出来る。

これは一種のパワーバランスの崩壊だった。

人間鍛えてしまえば、ISなんかただのスーツと変わらないし、男だろうが女でISを使えなくても策を練って挑めばISを倒せてしまう可能性もある。

もちろん、絶対防御は無敵ではないのだ。

今の戦闘は、その事をありありと見せつけた。

「さて、これでISと言う絶対的勝利は消えた。」

「みんなもわかったと思うけど、ISは万能じゃない。ISがなければ男の子も女の子も変わらないんだよ☆」

千冬と束がそう言うと、呆然としていた生徒一同は気がついたのか、管制室の方を一斉に見る。

「女尊男卑が当たり前だと思ふなよ?・・・解散!教室に戻れ!」

千冬は念を押した。

この発言で、女尊男卑の考え方が少しでも変わってくれる事を祈りつつ・・・。

唯、謝罪する。ユリ誕生のきっかけ（ちなみにユリはやりすぎたとかまったく考

雑だ・・・。

あるゲームの施設名が入っています。

わかるかな？

唯、謝罪する。ユリ誕生のきっかけ（ちなみにユリはやりすぎたとかまったく考

保健室

「う・ん・ん・ん。」

セシリアは目を覚ました。

セシリアは周囲を見渡すと・・・

「ん、起きたか。」

「ヒ・・！？」

唯の姿を見た瞬間、セシリアはおびえる。

先ほどの戦闘を思い出したのだろう。

それを見た唯はため息をひとつはき、セシリアの寝ているベッドに近づく。

「安心しろ、とって食うわけじゃない。それよりさっきはすまなかった。」

「え・・？」

セシリアはわけがわからなかった。

唯が自分に対して頭を下げているのだ。

「少しやりすぎた。とにかく、俺が言いたかったのはI Sがあるから女性は強いんじゃない・・。相手が男であろうが女でI Sが使えなくても策さえ練ってしまえば誰でもI Sを倒せる可能性があるって示したかったのさ。」

「あ・・。」

セシリアは思い出す。

唯は確かに生身で自分に勝った。

そしてその意味することは女性とI S は最強ではないということ・・・。

「ま、全ての男が俺みたいだって考えないほうがいい。・・・あんなことできるのは俺は人間じゃなくなったから・・・。」

「え・・・？それはどういう・・・？」

唯の顔に影が差し込む。

唯の言葉に反応して唯に聞き返すセシリア。
すると唯が突然立ち上がる。

「さあ、教室に帰るか。立てるか？」

「・・・ええ。」

「んじゃ、いくか。」

2人は教室に向かう。

あと、ブルー・ティアーズの損傷はフレームのへこみ等少し整備すれば問題ないくらいだった。

放課後

「ん・・・んん。はあ・・・。」

授業が終わり、体を伸ばす唯。

そんな唯に声をかける一夏と箒。

「お疲れ様。唯、通学はどうするの？」

「しばらくホテルだな。まだ寮の部屋が準備できてないだろうし。」
「そうか。大変だな。」

教室のドアが開き、真耶と千冬が入ってくる。

「織斑くん、あなたの部屋が決まりました。」

「・・・えらく早いな。政府の指示か？」

「ええ・・・。これが部屋の鍵になります。」

唯は真耶から部屋の鍵を受け取り、部屋番を見る。

「1025・・・。」

「え!？」

唯の部屋番を聞き、箒が驚く。

「どうした？箒？」

「その部屋番・・・私の部屋だ・・・。」

「そうか。まあ、しばらくの間よろしくな。箒。」

「あ、ああ・・・／／／（唯と一緒にの部屋・・・これで一步リードだ。）」

（む・・・、だけど唯は渡さないよ・・・。だって唯は私のヒーローで王子様なんだから・・・／／／）

箒は顔を真っ赤にしながらかほころび、一夏は唯に対する想いをさらに強くする。

同じころ、セシリアも・・・。

（織斑唯・・・。理想の男性・・・。あのだらしがない父とは全然違った意思の持ち主・・・。）

指を唇に触れさせる。
すると胸の鼓動が止まらなくなった。

（あなたのことをもっと知りたい・・・、そしてあの目はいったい何を意味しているのかも・・・。）

セシリアは唯が保健室で見たあの目が忘れられなかった。
セシリアも唯に恋をした・・・。

場所は戻って教室、唯は愛琉と束がどうなったのかが気になり聞く。

「あ、そういえば愛琉と束はどうなったんだ？」

「束は私と同じ部屋だ。水樹にもこのことは伝えてある。」

「了解した。」

一夏たちと共に部屋に向かい、簡単に決まりごとを決め就寝。
ちなみにクラス代表は一夏。

改めて代表戦を行い、唯はわざと負けた。

千冬が疑問に思い唯に聞くと・・・。

「めんどい。」

この4文字を返したただけだとか。

その日、唯は夢を見ていた・・・。

忘れもしないあの夜・・・。

織斑唯・・・そして織斑ユリのビギンズナイト・・・。

ミケランジェロ記念病院・・・全世界でその名前を知らないものなど

いない最高峰の医療設備と医療技術を備えた病院・・・。

IS学園もその設備を譲り受けており、相手が大統領であろうが一般人だろうが全ての患者に対して平等に扱い、あらゆる病気や怪我を治し、その後のアフターケアも万全・・・と全世界で最高の評価を受けていた。

だが、それは表向きの顔。

この病院の実態は恐ろしいものだった・・・。

「うぐ・・・」

唯は毎日のように薬を打たれ・・・。

「あああああ！！！！」

毎日人体実験を繰り返した・・・。

その影響で生まれたもうひとつの人格・ユリ。

唯の中に眠っている狂気が表に出た人格・・・。

広大なフロアに医者や強力な防護服をまとった警備員や生物実験で生み出された化け物・・・。

それらの死体があちこちにあった。

「ウフフフ・・・アハハハハハハ！！！！！！この程度なの？ねエ、もつとボクと遊んでヨ。もつとボクヲメチャクチャニコワシテヨ。このテイドじゃ満足デキないヨ・・・。マダ足りないな・・・。もつともつとアソンデヨ・・・。ウフフフ・・・アハハハハハハ！！！！！！」

血の匂いやいろいろな匂いが充満するフロアでユリは狂気の笑みを浮かべていた。

「うわあああ！！！！」

勢いよく起き上がる唯。

自身は眠っていたのだと気づいたのは目を覚ましてから少したったのことだった。

「・・・夢。思い出したくない悪夢・・・ん？」

なにやらやわらかい何かがあったので布団をめくる。

「・・・箒。何で俺のベッドにもぐりこんでんだ？」

箒が唯のベッドにもぐりこんでいたのだ。

「まあいいか。」

幸い目を覚ましていなかったのでもそろっと抜け出しジャージに着替え、ランニングに出かける。

ランニングを終えて帰ったとき、箒はすでに制服に着替えていた。

「む、おはよう。唯。」

「おはよう、箒。着替えるから少し待ってくれ。」

「わかった、外で待ってるぞ。」

箒が外に出たあと、唯は制服に着替える。

ちなみに今日の髪型はツインテール。

唯は気分髪形を変えるのだ。

「待たせた。」

「・・・お前髪形を変えただけで男に見えないぞ。」

「・・・そうしてもらえれば光栄の至り。束や愛琉にいろいろ着せ

替えられたからなあ・・・。」

そういった唯はどこか遠い目をしていた。

まあ、そのおかげで女装することに抵抗がなくなったわけだが。

（・・・今度女子物の何かを姉さんに頼んでみるか。）

箒はこっそりとこんなことを考えていた。

その夜

IS学園ゲート前

ここにボストンバッグとミルク缶を持ったツインテールが印象的な少女が立っていた。

「ここがIS学園ね・・・。唯、元気かしら？」

少女はメダルを取り出し、それを指で上に弾きキャッチする。
果たしてこの少女は何者なのだろうか？

唯、謝罪する。ユリ誕生のきっかけ（ちなみにユリはやりすぎたとかまったく考

ちなみにそのゲームのハードはPSで、いとこの家で始めてやってなかなか難しいと感じました。（初期バイオの操作方法とアイテムを12個しか持てない。しかも暴走する。）

EDで声優をみたらなんと豪華な声優さんだったのにはびっくりしました。

ちなみに主人公は石田彰さんです。

2週目・・暴走状態でもダッシュできるのでルートを覚え、ボスの攻略になれたら2時間以内にクリアできるかな・・。

いつになったらオーズ出せるんだろう・・。

バースは意外な人が変身します。

この小説の束はそこまで他人嫌いではないです。

再会と嫉妬とデート（前書き）

チヨロツと物語が動く？

しかしこの小説はどの方向に向かってんのかわかんなくなる作者。

再会と嫉妬とデート

食堂

「織斑さん！クラス代表おめでとうー！！」

その声とともに一斉に鳴るクラッカー。

壁を見るとクラス代表決定記念パーティーと書かれた紙がかけられている。

「……」

「よかったな、一夏。みんなお前のために開いてくれたようなものだ。まあ、楽しめ。」

呆然とする一夏に他人事のように声をかける唯。

ちなみに今は一夏と筈にはさまれる形で座っている。

一夏は唯をギロつとにらむが唯はどこ吹く風でコーラを飲んでいた。

「はいはい、新聞部です。話題の新生、織斑唯くんに特別インタビューをしに来ましたー！」

いつの間にか、やたらとテンションの高い人が唯たちの前にきていた。

制服のリボンの色を見ると、どうやら二年生のようなだ。

「あ、私は二年の黛薫子。よろしくね。新聞部副部長やってます。

」

自己紹介をしながら名刺を渡してきた。

「ん。これは丁寧はどうも。」

「じゃあ、早速だけなぜお姉さんにクラス代表を譲ったのかな？」
「一夏には実力と期待性がある。だからどこまで他のクラス代表に食らいつけるのかを見たかった。（まあ、本当はめんどくさかったって言うのが一番の理由だな。）」

「おー完璧なコメントだね。捏造する必要がないかな、これは。んじゃ、次はセシリアちゃん、コメントを・・・。」

唯の完璧なコメント。

だが、真実を知る一夏は・・・。

（うそつき！めんどくさいからわざと負けたって千冬姉さんから聞いたよ！！）

インタビュを終えた唯はポテトフライをつまみ食べる。

「じゃあ、織斑くんにほれたということにしておこう。」

「な、な・・・／／／」

「ん？」

唯はセシリアのほうを向くとセシリアは顔を真っ赤にしていた。

「インタビューが終わったことだし、二人とも並んで。写真撮るから。」

「えっ！」

「まあ、仕方がないか。」

先輩の言葉に、セシリアは嬉しそうな声をあげ唯は仕方なく席から立ち上がりセシリアに近づく。

「ほらほら、もっとくっ付いて。」

カメラを構えながら、手でくっ付いてと諭してくる先輩。

「そ、そうですか……。そう、ですわね。」

などと言って、モジモジしながらくっ付いてくるセシリア。

「おいおいセシル、近すぎないか？まあ、いいけど。（この殺気は一夏に筈？）」

体を近づけてくるセシリアに唯はあきらめたように身を任せる。
周辺の殺気が増したような感じがしたが唯はスルーをする。

「それじゃ撮るよー。35×51÷24は？」

「74・375」

「せいかりい。」

パシャッとカメラのシャッターが切られる。

「すごいなお前ら。忍者スキルでも持ってるのか？」

周りを見てみると、いつの間にかクラスの全員が唯たちの周りに集まり、写真に写っていた。

一夏と筈は唯の後ろとセシリアと反対の腕を持っていた。

「あ、あなたたちねえっ！」

「まーまーまー。」

「セシリアだけ抜け駆けはないでしょー。」

「クラスの思い出になっていいじゃん。」

「ねー。」

「う、ぐ・・・。」

といった感じで丸め込まれてしまったセシリアだった。

「唯くん、おはよー。ねえ、転校生の噂聞いた？」

朝、席に着くと近くのクラスメイトにそう言われた。

ちなみに織斑だとかややこしいので下の名前の唯で呼んでもらうようになった。

「ふむ、この時期に・・・。」

「なんでも中国の代表候補生なんだってさ」

（中国・・・あいつか・・・？）

唯は考えるがすぐに切り替える。

「あら、わたくしの存在を今更ながらに危ぶんでの転入かしら。」

いつの間にか近くに来ていたセシリアが、腰に手を当てながら話に入ってきた。

「いや、私も一応代表候補生なんだけどね・・・。」

これまた、いつの間にか近くに来ていた一夏が腕を組みながらそう言った。

「このクラスに転入してくるわけではないのだろう？騒ぐほどのことではあるまい。」

さらに、先程まで自分の席（窓側の最前列）に居たはずの箒まで近くに来ていた。

（すごいね、いっちゃん、ほーちゃん、セシルちゃん。）

（本当だな。一夏たち、いつからそんなに隠密活動ができるようになったんだ？）

感心するユリに相槌を打つ唯。
そして転校生に思いをはせる。

「中国か・・・」

「むっ・・・気になるのか？」

「まあな。もしかしたら知り合いかもしれんし。」

（むう！）

「だが、専用機持ちは1組と4組だけだと聞いている。一夏の実力ならば問題はなからう。」

（ん？4組って確か簪のクラス。簪は専用機持ちだけど俺がアストレイを作ったから打鉄式式の開発は凍結しているはず・・・とりあえず詳しい話を聞きにいくとするか。）

唯は生徒会長の妹の簪と仲がよく（たまたまぶつかり、お詫びとして唯がスィーツをおごったのがきっかけ。）助けたいと思う人物の一人。

逆に姉である更識楯無にいい印象を抱いていない。

自己犠牲の考えを持ち、妹のことを微塵も理解しようとしなない、助けを求めているのに手を伸ばさない・・・

こんな会話をしていると不意に入り口から声が響く。

「その情報、古いよ。二組も専用機持ちがクラス代表になったの。」

そう簡単に優勝できないから。」

腕を組み片膝を立ててドアにもたれかかっていたのは中国でパートナーだった少女。

「鈴？久しぶりだね！」

「久しぶりね、一夏。中国代表候補生、凰鈴音。今日は宣戦布告に来たってわけよ。」

ドアから体を離し、こちらに向かってきた鈴。

唯の席の前まで来てこちらを見ながらふわりと笑った。

「ゆ、唯。ひ、久しぶり。元気にしてた？／＼／＼」

「ああ。鈴こそ元気にしてたか？」

「う、うん．．／＼／＼」

顔を真っ赤にしてモジモジし俯いてしまった鈴の頭を撫でた。

「あっ．．．」

それを、気持ちよさそうに目を細めながら受け入れた鈴。

（鈴ちゃん、相変わらず猫みたいだね。）

（だな。）

唯が鈴の頭をしばらくなでていると．．。

「おい、何をしている。」

スパンツ！！

鈴の頭をわしわしと撫でていると、鈴の頭エクスカリバーに出席簿が炸裂した。

「にゃー!!」

鈴は猫の様な声をあげて涙目になりながら頭を押さえていた。

「もうSHRの時間だ。教室に戻れ。」

「ち、千冬さん・・・。」

「織斑先生と呼べ。さっさと戻れ、そして入り口を塞ぐな。邪魔だ。」

「す、すみません・・・。」

（むう、鈴は千冬姉さんが苦手なのか。）

「またあとで来るからね!逃げないでよ、唯!!」

そう言って教室から出て行った鈴。

なんて言うか、悪役の捨て台詞みたいだな。

「・・・唯。今のは誰だ?知り合いか?偉く親しそうだったな?頭を撫でるほど親しいのか?」

「唯さん!あの子とはどういう関係で?頭を撫でるなんて・・・。」

「唯!なんで鈴の頭を撫でたの!?!そもそも鈴と知り合ってたの!?!」

箒、セシリア、一夏を筆頭に、次々と質問が飛び交う。

スパンツスパンツスパンツ!!

「席に着けバカども。」

千冬の出席簿が火を噴いた。
こうして今日も一日が始まった。

昼休み

「唯のせいだ！」

「そうだぞ！」

「全くですわ！」

「何だよ、それ。すごい理不尽だな。」

昼休みになったとたん、一夏、箒、セシリアに文句を言われた。
この三人、午前中の授業だけで山田先生に五回注意され、千冬に三回叩かれていた。

「それより、学食に行くぞ。席がなくなるからな。」

そんなことを気にしないで、さっさと学食に行くことにした。
後ろでは一夏たちが文句を言っているような気がするが、唯は無視を決め込む。

食堂につき、それぞれ券売機で自分の昼食を買った。

（フム、そろそろ弁当を作ったほうがいいか？）

ちなみに、今日は和食セットにした。

「待ってたわよ、唯！」

昼食を持って席に着こうとしたら、鈴が目の前に立ちふさがっていた。

「鈴、通行の邪魔になってるからどいてくれ。」
「う、うるさいわね。わかってるわよ。」

と言いつつ、隣に来て一緒に歩き始めた。

「なんで着いてくるんだ。」
「べ、別にいいでしょ!!」

後ろからは、明らかに不機嫌ですといった雰囲気を出している一夏と殺気を出している箒とセシリアが付いてきていた。
空いている席が見つかりそこに腰を下ろす。

「さて、1年ぶりぐらいか。渡したアレ、少しは腕を上げたか？」
「もちろん!また勝負しましょ!」
「フ、まだ負けるわけにはいかな。さてと・・・」

唯は視線を一夏たちのほうに向ける。

「唯、何で鈴と仲がいいの!？」
「そうだ、どういった関係なのだ!？」
「ま、まさか付き合っているんじゃない?」

3人は矢継ぎ早に話しかける。
唯はそんな3人を見てため息をつく。

（はあ、異性として好かれるのはいい・・・。だけど俺は人間じゃない・・・。もし、一夏たちがこの事実を知ったとき、どんな反応をするんだろうか・・・。）

唯は鈍感ではない。

一夏たちが自分に好意を持ってくれていることはすごくうれしい。だが、自身が人間ではなくなってしまうたことに対して負い目を感じている。

事実を話したら彼女たちは受け入れてくれるのだろうか？

拒絶されてしまうんじゃないか？

そんな考えがよぎってしまう。

唯は考えを振り切り、3人に鈴とはどういった関係なのかを説明する。

「任務で中国に行ったとき依頼主に紹介されたのが鈴だ。で、俺が中国にいる間ずっと行動を共にしてきたパートナーだ。」

「そう！あたしが一番唯の事を理解してるのよ！」

鈴は胸を張って言う。

「うゝゝゝ。」

「むゝゝゝ。」

「ぬゝゝゝ。」

一夏、箒、セシリアはうなり始めた。

「はぁ・・・。」

唯のため息はすぐに掻き消えた。

その後、一夏と箒がものすごい剣幕で次の休みの日は買い物に付き合え！！といってきたので唯はコクコクと首を縦に振ることしかできなかった。

2人・・・特に一夏の目からハイライトが消えヤンデレのような眼差しに変わっていたからそれはもう怖かった。

週明けのクラス代表マッチ、一夏の相手は・・・。

鈴だった。

土曜日・ゲート前

唯はここで一夏たちを待っていた。

唯の服装は赤のシャツに黒のロングコート、それにジーンズ。ふと周囲を見渡すと一夏たちが走ってやってきた。

「ごめ〜ん、待った？」

「いや。大丈夫だ。」

「それじゃあ、いくぞ。」

箒が腕を組んでくる。

一夏も負けじと反対の腕を組んでくる。

（2人とも胸が大きいな・・・。）

（あゝ、唯ったらエッチイ考えをしてる〜♪）
（うっさい！）

2人とも胸が大きいので人間ではなくなったが年頃の少年である唯は両側から感じる嗜好の感触を味わっていた。

電車を降りしばらく歩いているとある女性が唯たち・・・正確には一夏たちを見つけ嫉妬といろんなものが混ざった負の感情のこもった眼差しを送っていた。

「あれは織斑さんに篠ノ乃さん・・・？私の教育を理解しなかったうえにあんなイケメンとデートをしているなんて・・・！」

「ヒヒ、その欲望、開放しろ。」

「え？」

青年の声に振り向くと頭部に投入口が現れ、そこにメダルらしき何かが入り込む。
すると包帯をまとった何かが現れる。

「な、何・・・？これ？」

「それはお前の欲望の化身だ。」

「私の欲望の化身・・・？」

自分の欲望と聞き、女性の口元が歪にゆがむ。

「フフ、なら織斑さんと篠ノ乃さんをつれてきなさい。あの2人には再教育が必要みたいだから・・・。」

「御意。」

そういつて怪物・・・白ヤミーは脱皮しクモヤミーとなり唯たちを追
い始める。

炎を司る天空の覇者（前書き）

ついに・・・オーズ参上！

炎を司る天空の覇者

レゾナンス

一夏と箒にはぼ引っ張られながらやってきたのは最大級の品揃えを誇るショッピングモールだった。

唯は束から「女性の買い物は時間がかかるんだよ☆」と聞いていたが両手に持っている荷物を見てため息を吐く。

（まさかここまでとは思ってなかった・・・）

（女の子ってそういうものだよ♪）

唯は時計を見ると正午近くを指していた。

「おい、そろそろ昼だ。」

「あ、じゃあ今話題のお店に行こうよ。」

「じゃあ、そこに行こうか。でもその前にトイレに行かせてくれ。」

「む、仕方がないな。早く行ってこい。」

「じゃあ、荷物は私たちが持っておくね。」

唯は2人に荷物を預け、トイレに向かう。

戻る途中、たまたま同じ場所に買い物に来ていたセシリアと合流。待っている場所に戻るとそこには人だかりができていた・・・。

「いったい何があったのでしょうか？」

「とにかく行ってみよう。・・・すみません。」

人ごみを掻き分けるとそこにはクモの糸らしき何かで動きを封じ込められた警備員の姿があった。

唯はすぐさま警備員に駆け寄る。

「おい！ いったい何があった！？」

「お前、あの女の子たちの知り合いか？ いきなりクモみたいな化け物が現れて女の子二人をさらおうとしていた・・・。俺は止めに入っ
たがこの有様だ・・・すまない。」

唯は舌打ちをする。

（クソッ。俺がトイレに行った隙にいったい何があったんだ！？）

すると唯の手に緑色の缶が振ってくる。

「あら、何ですの？ これ？」

「これは・・・！？」

緑の缶・・・バツタカンドロイドは唯の手の上で変形し、バツタカンドロイド・アニマルモードに変わる。
セシリアはそれを見て驚く。

「か、缶が変形した！？」

さらに・・・。

『唯！ 聞こえる！？』

「鈴か！ どうした！？」

『ヤミーよ！ 場所はあるんだが今いるところから離れた空き倉庫みた
いね！ あたしも後から行くから先に行ってて！』

「わかった！ アレも持ってきてくれ！」

『了解！』

唯は鈴との通信を終え、セシリアのほうに向き直る。
唯の表情は真剣そのものだった。

「セシル、これから先は非日常の世界だ。どうする？ ついてくるか？」

セシリアは唯の表情を見て少し考える。

（唯さんはいったい何を知っているのでしょうか？ 知りたい・・・）

「お願いします。私も一緒に連れて行ってください。」
「わかった。」

唯は周囲を見渡す。

ある自販機が目に入りロングコートを翻しそこに向かう。
セシリアもついていく。

「あの・・・唯さん？ 急いでいるのでは？」
「まあ、見てろ。」

唯はメダルを取り出し、自販機に投入。
そして真ん中のボタンを押す。
すると・・・。

ガシャン！

「じ、自販機がバイクに！？」

セシリアは驚いた。

自販機がバイクに変形したのだから。

これがセルメダルを解析した東と唯の共同制作によるメダルシステムのひとつ・・・可変型カンドロイド移動基地・ライドベンダー。

「セシル、早く乗れ！」

「ハ、ハイ！」

唯からヘルメットを受け取ったセシリアは唯の後ろに乗り込み、腰に手を回す。

「しっかりつかまれよ！タカカン、道案内を頼むぞ！」

「ピー！」

タカカンの道案内を受け、目的地に走らせる。

空き倉庫

一夏と箒はクモヤミの糸で身動きが取れなくなっていた。

「く、動けない！」

柱の影から現れ、一夏たちの前に立つのは宿主の女性。

「久しぶりね。織斑さん、篠ノ乃さん。」

「あなたは・・・！？」

「円山・・・先生・・・！？」

女性・・・円山は一夏たちの小学生のときの担任。

ISの台頭で女性が強いが当たり前という歪んだ思想を持っている。円山は特に世界最強の女性・千冬の妹である一夏、ISを開発した

束の妹である箒に虐待とも取れるほどのイジメを率先して行っていた。

「あなたたちのお姉さんの千冬さんと篠ノ乃博士は私たち女性を救うべく立ち上がった救世主よ！それなのにこの程度で音を上げるなんてどういうことかしら！？」

「いい？私だって好きでイジメを率先しているわけじゃないの。あなたたちがはいと言えばそれですべての女性が救われるの。」

手本となり子どもたちを教育する教師とは思えない発言の連続だった。

一夏たちはこの出来事を思い出し、いつものかわいらしくきれいな表情から一変し恐怖の表情に染まる。

「い、いったい何のためにこんなことを！？」

「ふう、あなたたちは私の教育をまったく理解してなかったみたいだから特別に再教育してあげるためにここにつれてきてもらったのよ。この私の欲望の化身を使ってね。」

「な！？」

まさかの発言に一夏たちは呆然とする。

今でもこの思想が直っていなかったとは思っていなかったようだ・・。

「大体私を差し置いてあなたたちはデートですって？ずいぶんいいご身分じゃない。」

「先生！あなたはおかしいですよ！」

「そうです！私たちは・・。」

「うるさい！さあ、もう一度私の教育をその身に受けなさい！」

円山は首でクモヤミーに行けと命じる。

クモヤミーが一夏たちの前に立ち、爪を振り下ろそうとしたその時、黒いバイクが現れ体当たりでヤミーを吹き飛ばす。

「グォ!？」

「な、何・・・？」

一夏たちはバイクのほうに視線を向ける。

乗っていた人物が降り、ヘルメットを取る。

「大丈夫か？」

「唯!それにセシリアさんも!」

「一夏さん、箒さん、お怪我はありませんか!？」

唯とセシリアは一夏たちの元に駆け寄り、守るようにして前に立つ。

「お前がヤミーの親か。なぜ一夏たちをさらった？」

「あなたには関係ないわ。」

「いや、ある。俺は千冬姉さんと一夏の弟であり、世界で唯一ISを操れる男・・・織斑唯だ。」

「あんたが・・・!？」

円山は驚く。

まさか目の前の男が今世間を騒がせているISを操ることができる唯一の男・・・。

「早くその男を殺しなさい!」

「御意。フン!」

クモヤミーはクモの糸を吐く。

だが、それは唯の元に届くことはなかった。

円型のエネルギー弾がクモの糸を撃ち落としたのだ。

「今度は何なのよ!？」

円山はエネルギー弾が飛んできた方向に視線を向ける。

またもや黒いバイクでそのライダーはヘルメットを取る。

「ふう、間に合ったみたいね。」

「鈴! どうして!？」

鈴が両手持ち銃・バースバスターでクモの糸を撃ち落としたのだ。
鈴はライドベンドーから降りて銃口を円山に向ける。

「一夏、箒、あんたたちも災難だったみたいね。いるのよたまに。
歪んだ思想を抱いている大人って言うのが。」

「黙りなさい! なぜ私の邪魔をするの!？ 私はただ教育をするだけ・
。」

「ふざけんじゃないぞ。」

唯は腹の底から冷えた声を出す。

「あんたは勘違いしているみたいけどな、ISがなかったら男も
女も関係ないんだよ。」

「あ、あんた・・・!」

「前のセシルならあんたの思想にたぶん賛成しただろう。だけどセ
シルは早い段階で気づいた。これからセシルは大きく成長する。こ
れは間違いなく断言できる。」

(唯さん・・・)

思わず唯の言葉に感激するセシリア。

「まあ、あんたはもう手遅れみたいだな。」

「ふん、あんたにこの私の欲望の化身を倒せるのかしら。」

「倒せる。あんたは俺の家族、大切な幼なじみに手を出した。絶対に許すわけにはいかない。」

そういつて唯は一步前に出る。
腰にオーズドライバーを装着。

「唯！ほら！」

「サンキュー。」

鈴はコアメダルが収められたメダルホルダーを投げ渡す。

そして中から赤と黄色と緑のメダルを取り出しドライバーのくぼみにセットして傾ける。

そして右腰についている丸い器具・オースキャナーでドライバーをスライド。

「変身！」

（タカ！・トラ！・バッタ！）

（タ・ト・バ♪タトバ♪タ・ト・バ♪）

唯の体が視覚を強化する赤のタカヘッド、トラアームが付属した黄色のトラアーム、ジャンプ力、キック力を強化する緑のバッタレッグに変わる。

これが数あるコンボの中でも安定性がある基本形態・仮面ライダーオーズ・タトバコンボ。

「唯の・・・」

「体が・・・」

「変わりましたわ・・・」

一夏、箒、セシリアは啞然とする。

そんな中、オーズは円山を力強く指差す。

「お前の歪んだ幻想・・・、この俺が破壊する！」

「何を！行きなさい！」

「鈴、一夏たちを頼む。」

「わかったわ！」

一夏たちを鈴に任せ、オーズはクモヤミーに立ち向かう。

「ふっ！」

「ぎゃあ！？」

オーズはトラクローを展開しクモヤミーを切り裂く。

連続切り裂き攻撃を仕掛け、今度はラインドライブからバツタレッツグにエネルギーが供給され連続キックを叩き込む。

「つと。」

「ぬう・・・、隙あり！」

「うわっ！？」

オーズの体にクモの糸が絡みつき引き寄せられていく。

「捕らえたぞ。じっくりいたぶってやる。」

「それはどうかな？」

オーズは手首を動かし、トラメダルを外し、緑のアームメダル・カマキリメダルをセットしてスキャン。

（タカ！・カマキリ！・バッタ！）

オーズはタカキリバにフォームチェンジしてカマキリソードでクモの糸を切り裂く。

「はあ！」

「何！？切れただと！？」

そしてそのままクモヤミーにカマキリソードの連続攻撃を仕掛ける。その様子を見ていた一夏たちは驚く。

「腕が変わった！？」

「メダルを変えるとまったく異なる力になるというのか！？」

「そういうこと。さあ、もうすぐ決まるわよ。」

鈴の言葉に一夏たちは目線を戦いに向けると言うとおりクモヤミーは慢心相違だった。

「なぜ・・・！？なぜなの！？私は間違っていない！」

「まだわかんないのか？あんたは最初から間違っていたということをして！！」

オーズは赤のコアメダル2枚を取り出す。

「今回は特別だ・・・！お前の幻想・・・跡形もなく燃やし尽くしてやる！」

カマキリ、バッタをはずし、代わりにクジャク、コンドルをセットしてスキャン。

(タカ!・クジャク!・コンドル!)

(タ〜ジャ〜ドル〜♪)

オーズの体が炎にやさしく包まれる。

炎が晴れ、そこにいたのは全身を真っ赤に染めたオーズの姿があった。

これが炎を司る天空の覇者・・・タジャドルコンボ。

BGM・Time judged all (歌：織斑唯&篠ノ乃箒)

「今度は真っ赤になった・・・」

「アレは色を揃えて発動するコンボ。強力な力が得られる代わりに疲労が大きい・・・けど使いこなしているから欠点はないに等しいけどね。」

「きれいな炎だ・・・」

箒は先ほどのオーズの炎を思い出す。

あの炎はすべてを浄化する天壤の炎に見えた。

「ハッ!」

オーズはクジャクウイングを展開し飛翔。

急降下して体当たりを2回くり出し再び高く舞い上がる。

そして専用ツール・タジャスピナーを開き、中に収められているセル3枚を抜き取り代わりにドライバーのコア3枚を入れた後閉じグリップを握り、高速回転させオースキャナーでスキャンする。

(タカ!・クジャク!・コンドル!・ギン!・ギン!・ギン!)
(ギガスキャン!)

「おおおおおおお!!」

オーズの体が不死鳥の炎に包まれクモヤミーに向かって急降下。

「せいやああああ!!」

「がああああ!!」

オーズ・タジャドルコンボのギガスキャン技・マグナブレイズが炸裂しクモヤミーは爆散。

地上に降り立ったオーズは変身を解除。

「ふう・・・さて。」

唯は円山の下に歩み寄る。

「な、何よ。私は悪くないわ。」

「あんたはたたいたらほこりがいっぱい出そうだな。ちなみにあんたと一夏たちのやり取りはすべて記録してるからな。」

そう言って唯の掌にバツカンドロイドが乗る。

「こいつは通信や録音、映像の保管ができる代物でな。俺がここに来るまでのやり取りはすべて録画しているからな。」
「・・・!?!」

円山はがっくりとひざを突く。

「ま、こいつを姉さんや束、教育委員会、あとは日本政府に見せたらどうなるかな。少なくとも教員資格の剥奪は間違いないだろうな。後は暴行罪とかいろんなものが出そうだけどな。」

こうして事件は解決した。

この後セリアと鈴も含めた5人でゲームセンターなどに行ったりと楽しい時間を過ごした。

炎を司る天空の覇者（後書き）

次はクラス代表戦です・・・たぶん。

作者も実際に小学校の時に教師から虐待を受け登校拒否になったことがあります。

雷を司る昆虫の王者／東の欲望／愛琉との出会い（前書き）

愛琉が何者かがわかります。

雷を司る昆虫の王者／東の欲望／愛琉との出会い

その夜・千冬の部屋

ここに一夏、箒、セシリア、鈴を呼んだ唯。

千冬と束、愛琉もここにいます。

「さて、どうして私の部屋で話をしたいなんていったんだ、唯。」

今はプライベートなので下の名前で呼ぶ千冬。

「昼間の出来事を説明しようと思ってな……。鈴。」

「わかってるわ。」

唯はそうやってオーズドライバー、メダルホルダーをテーブルに置く。

鈴もバースバスター、バースドライバーを置く。

そして唯は説明をする。

円山から生まれた怪物はヤミーと呼ばれ、人間の欲望をエサに成長するということ。

そしてそれを生み出す親がグリードと呼ばれる怪物。

ヤミー、グリードを倒す戦士・オーズ。

メダルホルダーの中にはオーズの力の生命線とも言えるコアメダルがあった。

鳥系グリード・アークの赤、虫系グリード・ウヴァの緑、猫系グリード・カザリの黄、重量系グリード・ガメル of 白、そして水棲系グリード・メズールの青が納められていた。

一夏たちに話していないが実は唯の体内には恐竜系の紫がある。

その力は強大でその気になればISはおろかコアメダルをも破壊する力を秘めている。

同じ色のメダルをそろえることで強力な力を発揮するコンボのこと。ドライバーとメダルホルダーは休みで行った遺跡で偶然発見したと。

セルメダルを解析、束と愛琉ともにメダルシステムを開発。

カンドロイド、ライドベンダーを作った。

メダルシステムの最高到達点がバースシステム。

中国で鈴と出会い協力してヤミーを撃破、そのままバースシステムを託したこと。

「とまあこんなところか。」

「ちょっと待って。それじゃあ、鈴も仮面ライダーになれるの？」

「そのとおりよ。私に変身するのは仮面ライダーバース。唯みたいは何らかの素質がある人しか変身できないオーズと違って誰でも変身できるわ。」

それを聞いた一夏と箒が立ち上がる。

「だったら私たちにも！」

「やめときなさい。誰でもなれるといっても相応の訓練は必要よ。」

「私は日本代表候補生よ！」

「私は剣道で全国制覇をしたぞ！」

一夏と箒は力強く言う。

鈴はそんな2人を見てため息を吐く。

「ならついてきなさい。束さん、あと何機か製作をお願いします。
(ボソッ)」

「わかったよ。りーちゃん。」

鈴は一夏、箒を連れ部屋を出る。

千冬は束が鈴を愛称で呼んでいるのを見て驚く。

「しかし驚いたな。束が鳳に心を許すとは。」

「束は一度ヤミーに寄生された。束の欲望は一夏、箒、姉さん、俺以外の人物を全て消し去りたいと・・・。」

唯は思い出す。

束がヤミーに寄生されたときのことを・・・。

あのときの束は周囲に壁を作って拒絶していた。

そこをグリードに目をつけられてしまった。

「フフ、その欲望・・・開放しなさい。」

そして生まれたのはピラニアヤミー。

大量に傷ついていく人たちを見て唯は束に怒りの声をぶつける。

「束！これがお前が本当に望んだことなのか！？このことを箒が知ったら箒は悲しみ、自分を追い込む！お前も俺を改造した医院長たちと変わらないことをしているんだぞ！」

「うう・・・私は・・・私は・・・。」

唯の言葉を聴き、束はひざを突き泣き始める。

「ゆいにゃん！お願い！その欲望・・・壊して！！」

「了解！！行くぞ！！」

束は自分が間違っていることに気づいた。

唯はそれを汲み取り緑のメダル・・・クワガタ、カマキリ、バッタを

セットしてスキャン。

「変身!!」

唯はこのとき初めて・・・。

(クワガタ!・カマキリ!・バッタ!)

(ガタガタキリッバ!ガタキリバ!)

コンボを使った・・・。

オーリングサークルが緑一色になる。

電撃の広域攻撃ができるクワガタヘッド、腕にカマキリソードを装備したカマキリアーム、キックとジャンプを強化できるバッタレグ。

これが雷を司る昆虫の王者・・・ガタキリバコンボ。

BGM: Got to keep real (歌: 織斑唯&篠ノ乃
束)

「うおおおおおおお!!!」

オーズ・ガタキリバコンボは緑の波動とともに咆哮を上げ、特殊能力・ブランチシェードを発動し50人の分身を作り群れに突っ込む。

「ゆいにゃんが増えたー!?!」

驚く束を尻目にオーズGKBはピラニアヤミーを一気に減らす。

単体ではかなわないと判断したのか集合体の巨大ピラニアヤミーとなる。

だが、オーズGKBは臆することなく一斉にオースキャナーでスキ

ヤンする。

（スキヤニングチャージ！）

ピラニアヤミーは強力なビームを放つがオーズGKBはこれをジャンプでこれを回避、そのまま必殺技のガタキリバキックを叩き込む。

「せいやあああー！！」

50人のガタキリバキックを受けたピラニアヤミーは爆散。

オーズは変身を解くがふらつく。

「大丈夫！？ゆいにゃん！」

「ああ・・・」

「ふふ。面白いわね。あなた。」

2人は女性の声がした方向を向く。

そこにいたのはシャチの頭をしており、足はタコのような怪人だった。

唯はふらつきながらも束を守るようにして前に立ちメダルを取り出す。

「・・・っ。何だ？お前は？」

「そう身構えないで。私はグリードの一人・メズール。そのウサギにメダルを入れたのは私。」

「何のためにそんなことを！？」

「人間の欲望がどれほどのものかを見たかったの。だけどもういいわ。あなたに興味を持ったから。」

「・・・信じられないな。」

「ならこうしましょう。あなたたちと一緒に行動させて。そして私

は一切ヤミーを生み出さない。」

唯はメズールの目（？）を見る。

それで信じたのかため息をひとつ吐く。

「わかった。けどお前人間になれるのか？」

「フフ、問題ないわ。」

メズールはそういうと人間に姿を変える。

スタイルは束に負けないほどの巨乳でスラッとした長い足が特徴だ。

「これでどうかしら？」

「問題ないよ！よろしくね！いるちゃん！」

「いるちゃん？」

「水樹愛琉。それがいるちゃんの名前だよ！」

束が勝手に名前を決めたことに呆れる唯だが愛琉に右手を差し出す。

「束はもう……。まあ、よろしくな。愛琉。」

「ええ、こちらこそ。」

メズールは唯の手をとり握手を交わす。

こうしてメズール改め、水樹愛琉は唯たちと行動を共にするようになった。

3人で協力してメダルシステムを製作したり、愛琉のIS適正が高いことが判明して驚いたりあの一件以来束の他人嫌いが大幅に改善されたり……

いろんな出来事があった。

メズールから聞いた話を思い出すと残りのグリードであるウヴァ、

カザリ、アंक、ガメルは復活していないらしい。
だとしたらいったい誰がクモヤミを作ったのか・・・。

（あの医院長か・・・？もしくは卑怯者・・・。あいつらもコアを何枚か自分自身に取り入れたらしいからな・・・。）

思い当たる人物を頭の中に浮かべるが頭を振り、その考えを消去する。

（あいつらが来ようとも俺が必ず守って見せる・・・！）

決意を新たにする唯。

鈴SIDE

ここからはあたしね。

あたしは一夏たちを引きつれ中庭に来てる。
前方に使われなくなった植木鉢をおいた。

「見てなさい。」

あたしはメダルポッドを上にし込んだ後、下の持ち手の部分にセツト。

トリガーを引く。

あたしが撃ったエネルギー弾は寸分の狂いもなく植木鉢にヒット。

「ふう、こんなところね。一夏。やってみなさい。」

「わかった・・・。」

あたしはバースバスターを一夏に渡し、植木鉢を並べる。

「いいわよ。」

「よし・・・。」

一夏は意気込んでトリガーを引く。
だけど・・・。

「うわ!？」

やっぱりか・・・。

一夏は反動に耐え切れずに後ろに吹き飛ぶ。

「いたた・・・。」

「一夏、大丈夫?」

「鈴、ありがとう。大丈夫だよ。」

あたしは一夏に手を差し出す。

一夏は手を取り、立ち上がる。

「情けないぞ、一夏。」

「次は箒ね。」

あたしはバースバスターを拾い、箒に渡す。

「フ、この程度なら・・・!」

箒はバースバスターを構えてトリガーを引く。

「くう!？」

やっぱり箒も反動に耐え切れず吹き飛ぶ。

「箒、大丈夫？」

「すまない・・・。」

箒も手をとり立ち上がる。

「わかった？ バースになりたいならまず生身でバースバスターを扱えるようになりなさい。それと、代表候補生だの、全国制覇したあのそんなのは忘れなさい。これまでどおりの鍛錬じゃ、これを扱うことはできないわよ。」

「うん！ 絶対にそれを扱えるようになって見せる！！」

「あ、バースバスターは束さんに言って作ってもらってるからしばらくは体を鍛えときなさい。」

あたしはそういう残して後片付けを始めた。

雷を司る昆虫の王者／東の欲望／愛琉との出会い（後書き）

あれ・・・？

クラス代表戦までいけなかった・・・。

今度こそ・・・いけたらいいな・・・。

気づけばお気に入りが入りが70近く・・・。

乱入する敵はゴーレムじゃない・・・。

似たようなものだが違う・・・。

緑のコンボを歌った人の人選は適当です。（だって緑のイメージキ
ャラクターって思いつかなかったんだもん・・・orz）

クラス代表戦と因縁の機械（ロボット）（前書き）

ム・・・お気に入り70突破・・・？

こんな駄文を読者は愛してくれているとは・・・。

感謝感謝！

クラス代表戦と因縁の機械（ロボット）

中庭

「ふう、やっと終わったわね。」

鈴は植木鉢の後片付けを終え寮に戻ろうと歩き出す。

「ご苦労さん。」

「わっと。」

唯から缶ジュースを投げ渡され、鈴は慌てながらもそれをキャッチ。2人は近くのベンチで話をする。

「どうだった？一夏と箒は。」

「素質はあるわ。」

「そうか・・・。」

そこからしばらくの間2人は話をせず、風の音しか聞こえなかった。唯が話し出す。

「なあ。」

「どうしたの？」

「俺が人じゃなくなったことを知っているのはお前と束、愛琉だけだ。いつか話さなきゃいけないよな・・・。」

「・・・そうね。」

唯は鈴に自分が人じゃなくなったことを話している。

鈴はそのことに驚くも唯を受け入れてくれた。

「大丈夫よ、一夏たちもきつと受け入れてくれるって。」
「・・・だといいいんだがな。」

唯は空を見上げる。

空は満天の星空があった。

「ISって何なんだろうな。束は宇宙開発を目的に作ったはずなのに・・・。」

「・・・。」

「それがいつの間にかスペックを持て余すという理由だけで兵器としての開発が進んでいる・・・。どうして人は重力に縛られることしか考えないんだろうな・・・。この空を抜ければ未知の世界があるっていうのに・・・。」

唯はそこまで言って自嘲気味に笑う。

「って、俺が言えた義理じゃないよな。俺もGNドライブとツインドライブを搭載した黒百合を作ったんだから・・・。」

「唯・・・。」

唯は暗くなった空気を変えようとクラス代表戦ことを話す。

「さて、明後日だな。クラス代表戦。」

「そうね。」

「なんかイヤな予感はあるけど・・・全力で一夏と戦ってくれ。」

「そのつもりよ。誰が一番唯にふさわしいか決めなくちゃいけないから。」

「ははは。」

鈴の言葉に唯は笑い声を上げる。
だが、唯の予感 は現実のものとなってしまう・・・。

月曜・クラス代表戦当日

ピットでは一夏に鈴の専用IS・甲龍のスペックを説明するためにモニターを開いていた。

ピットには2人のほかに真耶、千冬、束、箒、セシリアがいた。

「いいか、鈴のIS・甲龍の武装・・・まずは近接ブレード・双天牙月。近接戦闘では互角だが注意すべき点は連結させて投擲してきたときだな。ブーメランのように戻ってくるから気をつける。それよりも問題はここだ。」

唯はある武装が搭載されている場所を拡大する。

「この武装・衝撃砲だ。砲身が見えない上にどこにいてもほぼ射程圏内だ。しかも燃費がいいと来たもんだ。」

「白式とは正反対だね・・・」

「一応左腕のところにビームバルカンを装備しておいた。この武装は連射性に優れている。だがこの武装はあくまで牽制用と割り切れ。あとは零落白夜を使うタイミングをしっかりと見極めろ。じゃなきゃエネルギーの無駄遣いで『シールドエネルギーエンプティーでおしまい』っていう事になってしまうからな。」

「うん、わかった。」

「織斑、そろそろ時間だ。」

「はい、・・・唯、勝ったら何かご褒美頂戴？」

一夏は唯を見上げるように見る。

一夏もかなりの美少女でスタイルもいいので唯は双子の姉とはいえ

ドキドキしてしまう。

「わ、わかった……。考えておくから行ってこい。」
「うん！」

一夏はピットを後にし、唯はため息を吐く。

（つたく、一夏のやつ、俺以外にもいい男がいるだろうに……。）
（いっちゃんはや再会したときから唯に好意を持っているよ？）
（困った姉さんだこと……。何事もなければいいんだがな……。）

唯はユリと会話を交わした後コーヒーを6ついれ、千冬の元に向かう。

アリーナ

「来たわね。一夏。」

「鈴！負けないよ！日本代表候補生としての力を見せてあげる！」
「ならあたしは中国代表候補生としての实力を見せてあげるわ！」

『それでは両者、試合開始！』

ピット

コーヒーを飲みながらモニターで観戦している唯たち。

「さて、始まったか。」

「一夏と鳳、どちらが勝つんだろうか？」

「一夏のコンセプトは完全に近接戦闘型。鈴は近接戦闘よりの万能

機っていうところか。だが白式の燃費が悪い。逆に甲龍は燃費のよさが売りだからな。一夏が勝つにはどれだけ早く決着をつけられるかどうかとビームバルカンをどう使うかが鍵を握る。」

衝撃砲をかわしつつ後退した一夏は鈴と再び向かうあう。

「へえゝやるじゃない。」

「こっちには優秀な軍師兼鬼教官がいるからね……。お姉ちゃんとしてあまり無様な姿を見せられないよ。」

2人の会話を聞いた千冬はどのような訓練を施したのかを唯に聞く。

「織斑弟、どのような訓練を施したのだ？」

「ん？金曜と日曜にセシルと箒に協力してもらって訓練しただけだけど。」

「いえいえ、唯さん。」

「あれはすざましい訓練だろう……。」

セシリアと箒は一夏に施した訓練を思い出す。
その訓練の内容とは……。

「オラオラオラア!!」

「わあゝ!?!? ちょ、ちょっと待ってえゝ!」

一夏は懸命に逃げる。

唯はGNフィンファンネルによるオールレンジ攻撃を仕掛けながら高速移動しつつGNビームガトリングを乱射していた。

「大体オールレンジ攻撃をしているときに動けるなんてそれなんて反則うゝ!?!?」

「一夏さん！止まっている暇はありませんわよ！」
「わわわ！？」

セシリアのブルーティアーズによるオールレンジ攻撃もプラス、一夏の動きが止まれば・・・。

「一夏あ！覚悟お！」

筈が近接ブレードで切りかかり、セシリアが絶妙なタイミングでスターライトMK-2改（唯と束の手で改造。燃費と威力の向上に成功。）による援護射撃が飛んでくる。

「にゃあゝ！？」

「まだまだいく・・・あれ？弾切れか？」

「・・・！スキあり！」

GNビームガトリングの弾が切れ、スキありとばかりにGNフィンファンネルのビームを潜り抜け突っ込む一夏。

だが、それが罠だと後悔するのは少し後。

唯はGNビームガトリングを収納、次に取り出したのは・・・。

「ショットガンって近ければ近いほどダメージが大きいんだよな。」
「ゲッ！？」

GNビームショットライフルをショットガンモードで放つ。

至近距離でビームの拡散弾を受けた一夏のシールドエネルギーが切れる。

「一夏、弾が切れたからって突っ込む癖を直せ。特に俺の場合武装が豊富なんだから。」

「うう・・・」

「明日はお前らと出かける約束があるから休みな。日曜日にまた弾幕鬼ごっこをやるからな。」

その言葉を聴いた一夏は絶望したという・・・

ピット

「まあ、弾幕鬼ごっこをしたぐらいだけどな。俺が弾幕を張って一夏の動きが止まったら箒が切りかかってセシルが援護射撃するっていうものだ。」

「・・・」

真耶は弾幕鬼ごっこを想像してしまってゾツとする。

アリーナでは2人が再び動こうとしていたそのとき、何かがアリーナのシールドを破って落下してきた。

煙が晴れ、その物の姿が明らかになる。

それを見た唯はすぐにマイクで2人に言う。

「一夏！鈴！すぐに退け！」

「え？え？」

一夏は何がなんだかわからずに混乱する。

するとロボットみたいな何かが動きを見せる。

「ウラギリモノ・・・ジャマ・・・」

ロボットらしき何かはそういうとなにやら音波攻撃を繰り返す。すると一夏と鈴は頭を抱えて苦しみだす。

「あああああ!!」

「あ、頭が・・・割れる・・・!」

ISのコントロールができなくなった2人は墜落。幸いにもISがショックを吸収したおかげで重傷にはいたらなかった。

ピット

ピットでも混乱していた。

唯はそのロボットを見て顔をしかめる。

そのロボットは唯にとってとても因縁のある相手だったのだから。

「謎の機械の墜落でシールドを貫通!! レベル4です!」

「あれの仕業だ。システムクラックに少し時間がかかるだろう・・・」

「解除にかかる時間は?」

「30秒ほどだ。だが、それを聞いてどうするつもりだ?」

「俺が行く。あれのことはよく知っている。」

「どういうことだ?」

唯は目を伏せるがすぐに千冬を見る。

「俺の過去に関係している・・・といっておく。とりあえず一機捕獲でいいか?」

「・・・ああ。気をつけてな。」

唯はピットを後にする。

姉とパートナーを救うために・・・。

カタパルト

唯はすでに黒百合を纏い、ロック解除を待っていた。

「唯くん！ロックが外れました！」

「了解した。・・織斑唯。黒百合。飛翔する！」

唯はアリーナに飛び出す。

一体のロボットが一夏に近づき、ナイフを展開して振り下ろそうとする。

「クロス・・。」

「させると思うか？」

瞬間、ロボットの体が斜めにバツサリと切れる。

唯の左手にはGNビームサーベルが握られていた。

ロボットたちは一斉に唯の方を見る。

「ウラギリモノ・・。」

「オマエガ・・。」

「ママヲコロシタ・・。」

「カタキヲトル・・。」

その言葉を聞いた唯は笑い始める。

「フフフ・・。アハハ！人形ごときがこの俺に勝てるとでも？」

そう言って唯は影縫いと不知火を展開しロボットたちに突っ込む。通りすがりに斬られたロボットたちは爆発音を上げ機能を停止していく。

「ふむ、こんなものか。」

9体いたのが一気に3体になる。
その剣さばきにセシリアたちは戦慄する。

「い、今・・・。」

「な、何が起こりましたの・・・？」

「すれ違いざまに斬っただけだよ。あれならちーちゃんでもできるよ☆」

だが、千冬たちは気づいていなかった。

箒がいなくなっていることに・・・。

唯は2体爆散させた後、残り一体を探す。

ラストターゲットを発見、接近しようとするがアリーナに声が響く。

「唯！負けるな！」

「箒！？」

箒の声に驚き、一瞬反応が遅れてしまう。

ロボットは箒のいる場所に向かって肩のビームキャノンを展開する。

「箒逃げろ！」

「・・・！？」

箒は一步も動こうとしなかった。

否、動けなかったといったほうが正しい。

唯は模索する。

ビームキャノン発射まで時間がない。

ならば切り札を切るまでと！

「トランザム！」

唯が叫ぶと黒百合が赤く輝く。

そしてブーストを全開にし一気に接近。

「うおおおおお！！」

影縫い、不知火でビームキャノンを破壊、蹴り飛ばし収納。

腰のビームサーベルをブーメランのように投擲して両腕を切り落とす。

「聞こえていたらよく聞け！！卑怯者！！」

再び影縫い、不知火を展開し一気に接近。

「俺の仲間たちに！！手を出すなー！！」

叫びながら両足を切り落とす。

この間、わずか45秒。

ツインドライブの調整が不十分なのでタイムリミットぎりぎりの一分でしとめられたことに安堵する唯。

「はぁ、はぁ・・・。何とか一機捕獲できたな。任務完了・・・。（これを送ってきたのは間違いなく卑怯者・・・。これは何かの幕開けなのか・・・？）」

唯は胴体と頭だけになったロボットを持ち帰る。

こうしてクラス代表戦は幕を閉じた。

クラス代表戦と因縁の機械（ロボット）（後書き）

劇場版そらのおとしものを見ってきました。

予想外の展開でラストは少しウルって来ましたね・・・。

あ、ちなみに新しいエンジェロイドの中の人は箒さんです。

紅と青のIS／2人の転校生（前書き）

第二章の開幕です

紅と青のIS／2人の転校生

あの後クラス代表決定戦は中止になった。
シールドを破って侵入者が現れたのだ。
まあ仕方のないことだが・・・。

（この事件でIS学園のセキュリティの問題が浮き彫りになったな・
。。さて。。。）

そんなことを考え唯は保健室に向かう。

保健室

一夏、鈴は眠っている。

その横には箒、セシリアがいた。
そこへ唯が入ってくる。

「よう、一夏たちの様態はどうだ？」

「大丈夫だ。今はただ寝ているだけだ。」

「それにしてもあのロボット・・・唯さんを狙ってましたわね・・・。」

「唯、心当たりはないのか？」

唯は考えるそぶりを見せる。

「いや、ないな。粗方俺の誘拐を目的をした連中の仕業だろう。俺は世界で唯一ISを動かせる男だからな。そのサンプルとして捕獲したかったのだろう。（真実を言うのはまだ早い・・・。まだ確信がないからな・・・。）」
「なるほどな・・・。」

唯の言葉に箒たちは納得する。

しばらくして一夏たちも目覚め、この事件は幕を閉じる。

だがこの事件が陰謀の始まりとは誰も気づかなかった・・・。

しばらくして唯は学園の敷地内にある束の研究所にきていた。

政府に要求したら了承してもらえたのだ。

唯は赤のフレームをいじっている束に声をかける。

「束、どうだ？紅椿は。」

「後もう少しかな？学年別対抗戦の後ぐらいになりそうだね。ゆいにゃんのブルーフレームはどう？」

「俺もそのぐらいに完成かな。さて、システムに不具合が生じてないかのチェックとセシルのブルーティアーズの改良を行いますかね・・・。」

束が作っているのは箒の専用機・紅椿。

一夏の白式との連携をコンセプトに開発された第4世代型IS。

単一能力はエネルギー増幅を行う絢爛舞踏で近・中距離戦メインのISだ。

さらに唯は夏の臨海学校ぐらいまでに一定の技量をこなしたら後付武装を渡そうとその開発も行っている。

唯が作っているのは簪の専用機のアストレイ・ブルーフレームセカンド。

開発コンセプトはアストレイの発展。

唯がアストレイを作ったため、簪の打鉄式式の開発がストップしてしまった。

唯は自分の開発したISのせいで開発がストップしてしまったお詫びという名目で製作した。

最大の特徴は実弾系を無効化するTP装甲。

それに近・中距離戦に特化したL、狙撃、索的に特化したGへのフォームシフト。

共通武装として倉持よりもはるかに高性能のマルチロックオンシステムを搭載した肩部マイクロミサイルと脚部ホーミングミサイル、さらには近接用のコンバットナイフを装備。

従来のアストレイに比べていくらか特記した能力を付加させた。

とりあえず唯はブルーフレームのシステムチェックを行いセシリアの目標である偏向射撃をどうするか案を練るがいい案が浮かばずこの日の作業は終了。

翌日

唯はイヤホンから聞こえてくる音楽に耳を傾けていた。

チャイムが鳴り、唯はイヤホンをはずすと同時に真耶が入ってくる。

「おはようございます。皆さん。今日は転校生がやってきました。それも2人も。」

真耶の言葉に教室がどよめく。

情報の早い女子高生といえども情報をキャッチできなかったのだ。どよめくのは当然だろう。

「では、入ってきてください。」

そういつて入ってきたのは2人の転校生。

真耶は金髪の転校生に自己紹介を促す。

「では、自己紹介をお願いします。まずはデュノアくんから。」

「はい。シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れなことも多いかと思いますが、みなさんよろしくお願いします。」

転校生の一人、シャルル・デュノアはにこやかな顔でそう告げ、一礼する。

それにあっけを取られたのは唯を除くクラス全員だった。

「お、男・・・？」

誰かがそう呟いた。

「はい。こちらに僕と同じ境遇の方が居ると聞いて本国より転校を・・・。」

人懐っこそうな顔。

礼儀正しい立ち振る舞いと中性的に整った顔立ち。

髪は濃い金で、それを首の後ろで丁寧に束ねている。

身体はスマートで制服がよく似合っている。

「きゃあああああ——っ！」

女子が歓喜の声を上げる。

だが唯は眉を潜め不審に思っていた。

（おかしい・・・この時期に男子が転入してくるならニュースや新聞とかのメディアで大々的に取り上げられるはずだ・・・それ以前にデュノアのおっさんが本当にこんなことするか・・・？）

唯はデュノア社長と面識がありそのときから娘バカ振りを発揮して

いたことを覚えている。

そんな社長がこんなマネをするのか？

そんなことを考えていると銀髪の少女が自己紹介を行う。

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ。」

クラスメイト達の沈黙。

「あ、あの、以上・・・ですか？」
「以上だ。」

空気に耐えれなくなった真耶が精一杯の笑顔で訊くが、返ってきたのは無慈悲な答えだけだった。

（フム、ボーデヴィツヒは軍人か。・・・！？）

唯がそんなことを考えているとラウラが一夏に激しい敵意を向けていることに気付いた。

「！貴様が――」

「え？」

ラウラが一夏の席に近づいていた。

唯はすかさず立ち上がり・・・。

「・・・お前は。」

ラウラが一夏に平手打ちする前に唯が手首を掴んで阻止。

「ほう、力のある軍人というのは無力の一般人に対して無差別に手

を上げてもいいのか？」

「貴様・・・！何者だ？」

「千冬姉さんと一夏の弟の唯だ。俺の眼の黒い内は一夏に手を出させない・・・。」

唯はそれになど付け加え殺気を強める。

「家族を大切に思う・・・。それが当たり前の反応だ。」
「・・・！？」

ラウラは唯の放つ殺気に当てられ背中に冷や汗をかく。

（何だ・・・！？こいつは・・・！？）

ラウラは腕を振り解き空席に着く。

「唯、ありがとう。」

「気にすんな、家族を守る・・・当然だろう。」

そう言って唯は自分の席に戻る。

（やっぱり唯は私のヒーローだよ・・・。だから大好き・・・。）

一夏はそんなことを思った。

休み時間

唯は屋上に上がり、ある人物と連絡を取っていた。

『唯か？久しぶりだな。ニュースで見たぜ。』

「おかげで心の疲労が増えたけどな・・・学園に來た当初なんて見世物パンダ状態だったから・・・」

『ハハハ。で、今日は何のようだ？』

「シャルル・デュノア・・・彼の身の回りとラウラ・ボーデヴィツヒの調査を頼みたい。」

『そのくらいならお安い御用さ。報酬はいつものとおり友達価格。調査結果のデータは夕方までには唯のパソコンに送っておく。』

「OK。それじゃ。響によろしく言っておいてくれ。藤丸。」

『ああ。こっちにも顔出せよ。響も会いたがっていたぞ。』

「いろいろ落ち着いたら顔出すよ。じゃあな。」

そう言って藤丸との電話を切る唯。

「・・・して・・・!!」

「ん？この声は・・・」

帰る途中の廊下で話し声が聞こえてきた。

気配を消し、柱の影からこっそりと覗くと千冬とラウラが話をしていた。

「なぜこんな島国で教師なんか！もう一度ドイツ軍へ戻り教導をしてください！」

「私はもうIS操者ではない。ただの教師・織斑千冬だ。」

それを聞いた唯は誘拐事件の後情報提供の見返りとして教導を取っていたのかと推測。

「ですが！ここにいる学生はISをファッションと勘違いしています！」

「ほう・・・」

千冬の殺気が強まる。

それに気づく唯だが、ラウラはまったく気づいていない。

「あまりなめるなよ、小娘。たかが15歳で専用機を持った分際で自分は選ばれし者みたいな言い方をするのだな・・・」

「あ・・・わ、私は・・・」

「とにかく教室に戻れ。」

ラウラは何かを恐れるように瞳を震わせながら教室に戻る。

「さて、そこで隠れて聞いているやつ、気配の消し方は完璧だがきれいに気配を消しすぎているぞ。」

「あらら。未熟だったか。」

唯が現れ、千冬の前に立つ。

唯はたまたま話を聞いてしまったことを説明。

「唯、放課後いいか？」

「ああ。俺も聞きたいことがある。」

放課後

今日1日の授業を終え、唯は千冬に会いに来ていた。

「ラウラのことだな。」

「ああ。」

千冬の言葉に唯が相槌を打つと話し始める。

一夏誘拐事件が解決した後、千冬は見返りとしてドイツ軍で教導を

行っていた。

そこでラウラと出会った。

「なるほど……。姉さんを尊敬しているからこそ連覇を止めた原因の一夏を許せなかった……。というところか。でも俺は姉さんが取った選択が間違っていないと今でも信じてる。」

「唯、お前から見てラウラはどう映った？」

千冬の真剣なまなざしと質問。

唯もそれに対して少し考えて答える。

「そうだな……。あいつは自分が強いと思い込んでいる。けど心の奥底では自分が弱いとも思っている。そこから導き出す結論はあいつは強いのではなく、強がっているだけ……。俺はそう感じた。」

唯はラウラの目を思い出す。

千冬への尊敬、一夏への憎しみなど……。いろいろなものが混ざっていた。

千冬が強いのは一夏と唯という大切な家族がいるからこそ……。

ラウラはそのことを理解していない。

故に強がるしかないのだ。

そう考えた千冬は唯を見据える。

「唯、お前にラウラのことを任せてもいいか？」

「……わかった。俺もあいつに力というものを教えなきゃいけないと思ったからな。それはそうと姉さん。」

「何だ？」

「あの誘拐事件……。なぜ他の国は情報がキャッチできなかったのにドイツだけキャッチできたのか不思議に思わないか？」

「何？」

唯の言葉に千冬が反応する。

「確証はないけど・・俺はあの事件が仕組まれたものだと思っている。」

「だが何のために？」

「たぶんだけど・・姉さんのデータ採取が目的じゃないかと思う。確証がないからなんともいえないけどな・・。」

こんな話をしつつ唯は久しぶりに千冬と過ごした。
そのころのラウラ・・。

（織斑唯・・あいつも許さない・・！やつら姉弟を完膚なきまでに叩き潰し、教官の目を覚まさなければ・・！それが私がここにいる意味・・！・！）

チャリンチャリン・・。

ラウラの憎しみと同調するかのようにセルメダルがたまっていく・・。

シャルルの秘密（前書き）

今日オーズ見れなかった・・。

おのれー！！ 甲子園めー！！

変わりに昨日映画のカブトを見ました。

シャルルの秘密

その夜、唯は藤丸から送られてきた資料に目を通していた。それを見て唯の疑問の9割が確信に持つていくことができた。

「・・・やはりな。シャルル・デュノア・・・本名はシャルロット・デュノア。特異ケースを装い、中性的な容姿を利用して男子として転校。その目的は・・・俺のIS・黒百合のデータ採取、もしくはGNドライブの製造方法のデータ採取・・・ふざけんなよ・・・」

唯は過去自分が実験されたように人を道具として扱う人間を一番嫌悪している。

唯は携帯を手にとって部屋を出て中庭に向かい、デュノア社社長から詳しい事情を聞くことに。

「もしもし、おっさん？」

『・・・唯くんか？』

「ああ、友人に頼んで資料を見せてもらったが・・・あれは本当にあなたの差し金なのか？」

『まさか！私がシャルロットにそんなことをS絶対にさせない！！』

「なら考えられるのは・・・本妻か？」

『・・・すまない。私は最後まで反対したのだが・・・イグニッションプランからはずされてしまうことを恐れた妻が君のIS・黒百合とGNドライブに目をつけシャルロットを男子と見立てることでわが社の広告塔として利用するために強引に手続きを進めてしまったのだよ・・・』

「そういうことか・・・安心したよ。」

とりあえず最後の疑問が唯の勘違いであったことに安堵する。

『唯くん、君に依頼したい。』

「わかってる、シャルル・いや、シャルロット・デュノアの解放
だろ？報酬はあいつのISの改造とあいつの心からの笑顔・でい
いか？」

『シャルロットを・どうかよろしく頼む・！』

「わかった。余裕ができたら一度話をしておいたほうがいいぞ。」

『フム、シャルロットは私に対していい印象を持っていないだろう
が、話し合うことは大事だな。』

「分かり合えるさ。絶対に。じゃあな。」

唯は通話を切る。

時間を見ると夜9時を過ぎていた。

「ボーデヴィツヒの資料は明日でいいか・・。」

翌日の放課後・束の研究所

唯は簪を連れ、研究所に来ていた。

そして・・。

「真っ暗・・。」

「今明かりをつける。」

唯が部屋の電気を入れる。

「まぶしい・・。」

簪は目を細める。

室内の明るさになれ、目の前の物を見ると目が輝く。

「これって・・・。」

そこに青のISがあった。

「簪、お前の専用機のアストレイ・ブルーフレームセカンドだ。」

「もしかして・・・これを私に・・・？」

「その前にお前に聞きたい。」

唯は先ほどとは違う声で簪に問いかける。

「お前・・・覚悟はあるか？」

「覚悟・・・？」

「そうだ。こいつに使われているコアはな、いわゆる無番号ノーナンバーなのさ。さらに第3世代をすっ飛ばしての第4世代型ISだ。まあ、簡単に言えば世界を相手にケンカする覚悟があるかってことだ。」

「・・・私は覚悟はできてる。」

迷いのない目で簪が答える。

その目を見て唯はウソは言っていないと判断しカタログを渡す。

「完成は学年別対抗戦の後だ。それまでにこいつを読んでおけ。あとは要望があれば極力取り入れるから遠慮なく俺に言え。」

「うん・・・わかった・・・。」

カタログを受け取った簪の表情は少し笑っていた。

帰った後箒の部屋を引越し、シャルルと同室になった。

土曜日

この日唯はシャルルとともに一夏と鈴、セシリアと模擬戦をチェックしていた。

一夏と鈴の戦績は五分五分である。

「一夏、筋はいいけど射撃武器の特性について理解してる？」

「一応理解してるつもりだけど・・・」

「ならこうするか。デュノア、射撃武器なんでもいいから一夏に貸してやってくれ。認証も忘れるなよ。」

「え？・・・ああ、そういうことか。わかった。」

シャルルは唯の言いたいことを理解したようでアサルトライフルを呼び出し一夏に渡す。

「はい、認証はしてあるから。」

「ありがとう。」

「よし、あそこにある的を撃て。」

「うん。」

一夏はアサルトライフルを構え撃つ。

振動で銃口がぶれるものの的を撃ち落とせた。

「ふむ、なかなかいいじゃないか。」

「そうかな？」

「次はセシル、スターライトを貸してやってくれ。」

「わかりましたわ。」

セシリアからスターライトMK-2改を受け取った一夏は構えて撃つ。

これも的を打ち抜いた。

「さっきより振動が少ないね。撃った感じがしないというか・・・」
「さて、次は俺の番だな。こいつで撃ってみろ。」

唯はGNビームショットライフルを呼び出し一夏に渡す。

一夏はGNビームショットライフルを受け取り構えて撃つ。

「うわ、さらに振動が少ないよ。」

「一夏、実際に射撃武器を使ってみてどうだった？」

「えっとね。」

「待った。」

感想を言おうとした一夏を唯が止める。

「え？」

「・・・どうやらお客さんのお出ましのようだ。」

アリーナがざわつき始めたのでその方向を見るとラウラが自身の専用機・シュバルツレーゲンを展開してこちらに向かってきていた。

「織斑唯、私と戦え・・・！」

ISのオープンチャンネルで話しかけてきた。

「そんなことをして何のメリットがある？それに今は訓練中だ。模擬戦がしたいならちゃんと申請してから来いよウサギさん。」

「貴様・・・！」

逆行したラウラはレールキャノンを展開して撃とうとするが唯はすばやく両手にGNビームピストル2を展開して片方はレールキャノンの砲身をずらし、もう片方は足元に威嚇射撃を行う。

「聞こえなかったか？模擬戦がしたいのならちゃんと申請をして来
いって言ってんだよ・・・！ほかの生徒たちの迷惑になるって気づか
ないのか・・・！」

唯は威嚇と殺気をこめて言う。

「ちい！」

ラウラは引き返していった。
それと同時に殺気を緩める。

「すごいよ！唯！」

「本当だね！」

一夏とシャルルが唯の方に駆け寄り賞賛の言葉を言う。

「まあ、あそこまで行けとはいわないが・・・参考にはなったと思う。
銃身をずらすだけで射角が大きく変わるって言うことをな。」

その後、黒百合のツインドライブと新武装のGNソード？の調整を
行い部屋に帰宅。

「ふう、やっぱりツインドライブの調整は難しいな・・・。まだトラ
ンザムは1分だけしか使えないのは痛いな。幸いにもGNソード？
は明後日にも出来上がるからいいがな。ボーデヴィツヒの件もある
というのに・・・。」

ガチャ

「ただいま。・・デュノア？」

部屋に帰るもシャルルの姿はなかった。
耳を澄ますとシャワーの音が聞こえてくる。

「・・シャワーか。上がるまで宿題でもして待っているか・・。」

シャルルが上がるまでの間、宿題を済ませる唯。
するとドアの開く音が聞こえてくる。

「ふう、まさか着替えやタオルを忘れて入ってしまうなんて唯が戻
ってくるまでに早く・・。」

「・・・。」

シャワールームから出てきたのは生まれたままの姿のシャルルだっ
た。

そしてバッチリと目線があってしまう。

「・・とにかく着替えろ。話はその後だ。」

「う、うん・・。」

仕切りを出し、着替え始める。

（くそっ、わかっていたのにデュノアの裸を見ってしまうなんて・・

／／／

（シャルちゃん、結構胸大きかったね。ほーちゃんやいっちゃんほ
どじゃないけど揉みごたえはありそうだったな。）

（お前は黙ってろ！お前は俺の本能みたいなものだから絶対に表に
出てくるなよ！）

（わかってるって〜♪）

ユリに釘を刺すと同時に仕切りが引っ込まれる音が聞こえてくる。

「き、着替えたからいいよ・・・」

「・・・ああ。」

唯はシャルルの方を向くとそこにはジャージのシャルルがいた。

「・・・。」

「・・・。」

しばらくは無言で居心地の悪い空気が漂っていたが唯が口を開く。

「まさかこんなに早く正体を見ることになるなんてな。」

「え！？唯ははじめから僕が女の子だってわかっていたの！？」

「俺の交友関係をなめるなよ。お前の正体も目的もわかっている。」

「そう・・・なんだ・・・ヒック。」

唯の言葉にシャルルはうつむき泣き始める。

唯はため息をひとつ吐き、シャルルをそっと抱きしめる。

「心配するな、お前の正体もばらす気もないし、ある人からお前のことを頼まれてるからな。」

「え・・・？」

「俺はお前を自由にしてほしいっていう依頼を受けている。だからもう一人で抱え込むな。今は俺とお前しかいないから泣いてしまえ。」

「うん・・・ふえええん・・・」

唯はシャルルが泣き止むまで頭をなで続けた。

しばらくしてシャルルが泣き止み唯を見つめる。

「ごめんね。服汚しちゃって。」

「かまわないさ。シャルル・デュノア・いや、シャルロット・デュノア。お前はどうしたい？」

「僕の正体がばれたんだ・・・。本国へ強制送還されるだろうね・・・。」

それを聞き、唯はシャルルの肩をつかむ。

唯の表情は悲しそうだ。

「お前はそれでいいのか！？そこに自分の意思はあるのか！？」

「ゆ、唯・・・？」

シャルルは戸惑いと怯えの表情をしているけど止めない、唯はさらに言葉を続ける。

「確かにお前のやったことは悪いことかもしれない。だけどそこにお前の意思はなかったのだろう！？大人の勝手なエゴでお前という個人が汚されるのはいやなんだ！！」

「唯、どうしたの？」

唯は知らず知らずにシャルルの方を強く握ってしまっていた。

「あ・・・すまない。」

「うん、大丈夫。でも本当にどうしたの？」

唯は意を決し、千冬と一夏にも話していない秘密を話す。

「俺さ・・・両親に捨てられたんだ。」

「え．．？」

唯の言葉にシャルルは驚く。
唯はさらに話し続ける。

「捨てられた先のある病院で人体実験や薬漬けの毎日．．．この目もその影響から元に戻らなくなった．．．あとは．．．」

唯はカップに手をかざす。
するとカップが宙に浮く。

シャルルはそれを見て驚く。

「超能力と身体能力の異常向上．．．その病院を脱走して世界に絶望したときに束にあった。まあ、その後いろんなこともあったけど今を楽しんでいる。だからだろうな。デュノアを道具扱いした大人を許せなかったのさ。」

「そうなんだ．．．それでも僕は．．．」

「ここにいればいい。国家も特記事項第21項で手出しはできない。」

「あ．．！」

シャルルは特記事項第21項を思い出す。

IS学園に在学中はいかなる国家や団体も手出しはできないというものだった。

「ありがとう唯．．．でもどうして僕のために動いてくれるの？」
「友達をなくしたくないから。」

シャルルの問いに即答で答える唯。
それを聞いたシャルルは笑う。

その後、唯はシャルルの分の夕飯を取りに行き一緒に部屋で食べた。

ラウラの憎しみ・・・一夏のトラウマ（前書き）

3週間ぶりの投稿！

今日でオーズ終わっちゃった・・・。

最後のタジャドルが最高にかっこよかった・・・！

IS・・・

GNソード？を構える唯と雪片式型を構える一夏が背中合わせで立つ。

この後すぐ・・・！

ラウラの憎しみ・・・一夏のトラウマ

ある日の放課後

唯はシャルルを連れて研究所に行った後、一夏の特訓のためにアリーナに向かっていた。

「悪いな。わざわざ付き合ってもらって。」

「ううん、いいよ。僕も唯が設計した武器が気になっていたから。」

GNソード？が完成したため、一夏の特訓とテストを並行して行うと決めていた。

アリーナについたのはいい。

しかし・・・。

（何だ・・・？騒がしい・・・。それにいやな予感がする・・・。）

「一夏！」

「・・・！？」

先に観客席に着いたシャルルが叫ぶ。

その声を聞き、唯も観客席に姿を現す。

唯たちの目に映った光景は・・・。

セシリアと鈴のISがボロボロで気絶・・・。

さらに近くには打鉄をまとった箒もいたがこちらも気絶している。

ラウラがISを展開した状態で一夏を殴り続けていた。

「フハハ！どうした！あの男女の弟がいなければ何もできないのか

！
」

「いや！いや！助けてえ！唯！」

それを観客席で見ている唯。

突然頭を抱え苦しみだしシャルルはあわてて駆け寄る。

「う、ぐ、がああああ！！」

「唯！？」

唯の脳裏にあの光景がよみがえる・・・。

過去

ミケランジェロ記念病院

「ううう・・・。あああ・・・。」

唯の目の前には異形の化け物がいた。

唯は衝撃波・・・ナルコンを使い化け物を倒す。

しかし医院長は顔色一つ変えずに医局員に指示をする。

「クスリの投薬を。」

「しかし、これ以上は・・・。」

「かまわん。ここで壊れてしまったらそこまでだったということだ。
」

毎日クスリと実験に明け暮れた日々・・・。
そんな中・・・。

「大丈夫ですか？」

「奏・・・。大丈夫じゃない・・・。」

奏と呼ばれた少女が声をかけてくる。
千冬によく似た顔を持っているが違うのはその女の子はショートで鈴のついた髪止めが印象的な女の子だ。

「大丈夫ですよ、私が唯くんを守りますから。」

奏はニコツと微笑む。

その振動で鈴が鳴る。

チリン・・。

現実

「っは!?!」

唯は脂汗をかきながらも現実に戻ることができた。
シャルルが声をかけてくる。

「唯、大丈夫?」

「・・・ああ。それよりも一夏だ。」

唯は黒百合を展開。

シャルルもラファールを展開。

「ビームマグナムでシールドを破る。破ったらすぐに鈴たちを保護してくれ。」

「うん、わかった。」

唯はGNビームマグナムを構える。

キュオオオ・・・。

銃口にエネルギーが収束していく。

今回は一発だが五発分のエネルギーを収束。

唯はラウラに狙いをつけ・・・。

「そこだ！」

ズキューン・・・！

唯の目論見通り放たれたビームはシールドを易々と突破しそのまま一直線にラウラの元へ向かう。

「何！？」

ラウラはビームに気づき急ぎ回避するが・・・。

「バ、バカな！かわしたはずなのになぜエネルギーがなくなっているのだ！？」

「余所見をしている暇があるのか？」

「・・・！？」

ラウラの目の前には唯の投擲したGNビームサーベルがあった。

ラウラはAICを発動しビームサーベルの動きを止める。

「くっ・・・。貴様は・・・！」

「AIC・・・。確かに厄介だな・・・。ボーデヴィツヒ！なぜ一夏たちを痛めつけるようなマネを平然とできる！？」

「フン、覚悟もないものが戦おうとするからだ。」

「てめえ・・・。」

唯は声を震わせながらラウラをにらむ。

GNソード？を持つ手に力が入り目の前にいるラウラに切りかかりたい衝動を押さえ込む・・・。

「・・・今は一夏たちの治療が先だ。決着は学年別トーナメントでつける。そこでお前に力というものを教えてやる。」

「・・・いいだろう。貴様を完膚なきまでに叩き潰し教官の目を覚まさせてやる・・・。」

そういつてラウラと唯はISを解除。

唯はラウラの横を通り過ぎざまにこういった。

「ボーデヴィツヒ、千冬姉さんをはじめこの世の中に完全な人間など存在しない・・・。人は何かしら欠点があるからこそ支えあい生きている・・・。」

「・・・。」

唯の言葉にラウラは無言だった。

その後、一夏たちを保健室に運び込みISは愛琉に事情を話し束の研究所に持っていつてもらった。

保健室

箒、鈴、セシリアの怪我はそこまでひどくなく、2～3日安静にしていれば直るそうだ。

「どうした？鈴。挑発に乗るなんてお前らしくないな。」

「ごめん・・・。でもあいつ、あの人のことをバカにしたから・・・。」

「桐生さんか・・・。」

唯の脳裏に伝説の極道・堂島の龍が浮かぶ。

あの人からは生き様等いろいろなことを学んだ。

そのつながりで孤高の金融屋などいろんな人と出会った。

「・・・そうか。お前もあの人のことを尊敬していたからな・・・。」

「うん・・・。だから思わず頭に血が上っちゃって・・・。」

「まあ、みんな無事でよかったよ。セシルも筈も。」

唯はそういうが筈は思う・・・。

（鳳やセシリアは専用機があったからある程度戦えた・・・。私は置いていかれてしまうのか・・・？ 唯の隣でたたかうことはできないのか・・・？）

しばらく談笑する唯たち。

すると眠っている一夏が暴れだす。

「・・・いやあ！ いやあああ！！！！」

「おい！ 一夏！」

「一夏！ しっかりしろ！」

「どうしたのよ！？ 一夏！」

「一夏さん！ しっかりしてくださいませ！」

「一夏！ しっかり！」

暴れる一夏に声をかける唯たち。

それでも治まる様子はない。

「・・・！」

唯は自分の右手を見た後、一夏の頭に手を載せる。
メラトロピンを使い、一夏の夢を見ようというものだ。

一夏の夢

『これは・・・一夏の小学校時代か？』

そこは小学校だった。

周囲にいる子供たちは今、唯の姿は見えていない。

子一夏をいじめている円山とクラスメイトたちがいた。

「なぜあなたは・・・！」

「織斑さん、篠ノ乃さんあなたたちはどうしても・・・！」

「いい？私だっていじめを率先しているわけじゃないの。」

『なるほど・・・あの女のクラスメイトを巻き込んだ執拗ないじめがトラウマになっているのか・・・！』

しばらくするとクラスメイトたちが離れる。

それを見ていた現在の一夏が体育座りで泣き出す。

「ひつく・・・ひつく・・・いやだよ・・・何でお姉ちゃんの妹に生まれたの・・・？」

唯は後ろから現在の一夏を抱きしめる。

一夏には唯の姿は見えないが声は聞こえていた。

『大丈夫だ・・・俺は何があってもお前の味方だ・・・』
「え・・・？」

『さあ、目を覚ませ。俺の知っている一夏はこの程度じゃ心は折れないぞ?』

そういった瞬間、一夏と唯の目が開く。

「まったく、手間かけさせんな。」

「ありがとう唯。唯の声・・・聞こえたよ。」

その後、束が現れ一夏たちのISの損傷レベルがひどく、トーナメント出場は断念せざるを得ないということを告げられた。

唯はこの後、シャルルに自分とパートナーを組むように頼み、シャルルはこれを了承。

その夜・ラウラの部屋

「織斑唯・・・!必ず貴様を殺す・・・!」

チャリンチャリンチャリン・・・!

ラウラは唯への憎しみがさらに増し、セルメダルもたまっていく・・・。

ラウラの憎しみ・・一夏のトラウマ（後書き）

来週は宇宙キタアアー！な仮面ライダーフォーゼがスタート！

風を司る猛獣の王者（前書き）

よさこい祭りの宿泊先のホテルから投稿。

I S ・ ・

唯とラウラの視線がぶつかる。

画面が切り替わりGNソード？とプラズマ手刀が激しくぶつかり合
い火花を散らす。

この後すぐ・・・！

風を司る猛獣の王者

学年別対抗戦当日

「ふうゝ……。観客が多いな。」

「そうだねえ。」

唯が言った。

アリーナの観客席には各国のIS関係者が集まっていた。

「その中でも注目度が一番なのは唯だと思うよ。」

「まあそうだろうなあ。」

世界で唯一ISを動かせる男。

唯には不本意ながらその二つ名が付いてしまい世界各国の注目の的となっていた。

「さらに一回戦からボーデヴィツヒとのペアか……。もうこれはある意味宿命だよな……。」

そう、運命のいたずらか一回戦からラウラのペアと当たる唯たち。さらに唯には気になることがあった。

（ボーデヴィツヒのISにVTシステムが搭載されている可能性あり……。しかも巧妙に隠したつもりらしいが俺の親友にかかれば紙のようなものなんだよな。）

藤丸から受け取ったデータでラウラのISの情報を見ていた唯。

その中で開発、研究、搭載禁止にされているはずのシステム・VTシステムが搭載されている（かもしれない）ことに気づいた。しかも操者であるはずのラウラも知らない。

（ボーデヴィツヒはこれが搭載されている（かもしれない）ことは知らない……。システム発動には何らかの条件が有ると見ていいな……。まあ、戦ってみれば分かることか。）

唯はそこまで考え一旦考えを切る。
パネルを開き装備を確認する。

「ビームサーベル、不知火、影縫い、あとはGNソード……。遠距離用としてフィンファンネルとエリーゼ……。カートリッジは3つ……。」

「唯の装備は接近戦重視にオールレンジを絡めたスタイルかな？」

「まあ、そうなるな。デュノア、悪いが……。」

「うん、言いたい事は分かるよ。絶対に勝ってよ？」

「ああ。」

「仮に負けたら女子の格好をしてもらうからね。」

「了解。さあ、行くか。」

唯の言葉と同時に2人はISをまといカタパルトへ。

「織斑唯、黒百合。行きます！」

その号令とともに飛翔する唯。

（カッコいいな。僕もやってみようかな？）

「シャルル・デュノア、ラファール・リヴァイブ・カスタム？。行

きます！」

シャルルも号令とともに飛翔。

唯はある程度上空にきたところで目を閉じて精神集中を行い相手を待つ。

「・・・。」

そしてゆっくりと目を開き顔を横に向ける。
そこにはラウラが居た。

「今日という日を待っていた。貴様を倒し、教官の目を覚まさせる！」

「お前の幻想・・・この俺が破壊する・・・！」

『試合開始』

唯がそういった瞬間、試合開始の合図が響き渡る。

控え室

「始まったね・・・。」

「ああ・・・。」

「唯さん・・・。」

（何だろう・・・？嫌な予感がするわ・・・。）

モニターを見つめる4人。

上から一夏、箒、セシリア、鈴である。

鈴の横にはセルメダルがたくさん入ったミルク缶が置いてあり蓋の上にはゴリラカンと呼ばれるカンドロイドがあった。

アリーナ・観客席

「キヒヒ、始まったぜえ・・・。」

ある席に居た男の手には砕けたセルメダルがあった・・・。

唯は適度に距離を保ちGNソード？・ライフルモードでラウラに牽制を与える。

ラウラは右手を前に出し停止結界を発動しようとする。

「その能力の弱点は分かっている！行け！フィンファンネル！」

唯の命令を受け背中中のラックからフィンファンネルが射出される。

あらゆる角度からビームの雨が降り注ぐ。

さらに唯は動きながらエリーゼを鮮やかに打ち込む。

「確かにお前のその能力は脅威だ。だがそれを扱うには手に向けた方向にしか発動しないことと発動には多大な集中力が必要になる！そこを突けば何の脅威にもならない！」

「くっ！？まさかオールレンジ攻撃を仕掛けながら動くことが出来るとは・・・！ならば！」

ラウラはワイヤーブレードを射出。

唯はエリーゼで弾き返す。

「くっ、中距離戦か。ならフィンファンネルは不要だな・・・。」

エリーゼ、フィンファンネルを収納し再びGNソード？に持ちかえる。

唯はライフルモードで牽制を行いつつ接近を試みるがラウラはワイヤーブレードを巧みに操り、レールキャノンを撃ち込んでくるため近づけないでいた。

（くそっ、これじゃ近づけない・・・！ならば一か八か・・・！）

唯は何かを決意してGNソード？をツインランスモードに組み替え右手に持つ。

次の瞬間思いもがけない行動に出た。

「っし！捕まえた！」

「なっ！？」

唯は左手でワイヤーブレードを掴んだのだ。

さらに引っ張り寄せツインランスで切りかかろうとする。

「くらえ！」

「なんの！」

ラウラもプラズマ手刀を発動して応戦。

ガン！ガン！

会場の歓声とは別に激しくぶつかり合う音が響き渡る。

ある程度切り結んだ2人は距離をとる。

離れる際ふとシャルルの方を見るとパートナーを撃破したようだ。

「・・・。」

「・・・。」

2人は無言でにらみ合う。

「・・・お前が姉さんを尊敬する理由は分かる。強く、気高い・・・
だけどなあ・・・！」

唯はGNソード？を収納し影縫いを左手に、不知火を右手に逆手で持つ。

「姉さんだって完璧じゃない！！前にも言ったがこの世に完璧な人間なんか存在しないし姉さんは姉さんの道を歩んでいる！！それを俺たちがどうこう言う筋合いは全く無いんだよ！！」

「・・・まれ・・・」

「姉さんの経歴が傷ついても！！どんなことがあっても織斑千冬という人間は不完全な人間だ！！俺はそんな姉さんを支えてやりたいし、今まで一緒に居られなかった分姉さんと一緒にいたい！！」

唯は幼い頃に千冬と一夏と離れ離れになった。

だからこそ一緒に居て千冬や一夏と共に過ごし、一緒に要られなかった分の隙間を少しでも埋めようとしている。

それと同時に尊敬もしていたがラウラのように完璧さも神聖さも求めなかった。

世界を回っているときにある探偵が言っていた言葉がある。

この世の中に完璧な人間など存在しない。

不完全だからこそ支えあいながら生きている。

その探偵いわく、今は亡き師匠の受け売りらしいが唯の心に響いた。
この言葉を胸に秘め今を生きている。

世界最強の女性である千冬もISを開発した束もISを操ることができる自分も不完全な人間なのだから・・・。

「お前の身勝手な価値観だけで姉さんの人生を縛られてたまるか！
！」

「黙れえええー！！！！！」

逆行したラウラが切りかかろうとするがそれをかわす。

「この・・・バカ野郎ー！！！」

唯はライフルモードを撃ちながら距離をとり・・・。

「トランザム！！！」

唯の言葉と共に黒百合が赤く発光、トランザムにより威力が高まったライフルモードを収束モードで放ちレールキャノンを一撃で破壊。

「な、にい！？！」

レールキャノン破壊後一気にブーストを吹かして急接近。

ラウラが右手を差し出すときには既に唯はラウラの目の前に居た。

「な、速い！？！」

「でやああー！！！」

右足に不知火、左腕に影縫い、左足と右腕にビームサーベルをすれ違いざまに突き刺す。

さらに・・・。

「おらあああー！！！」

ツインランスで高く打ち上げ、一瞬のうちにラウラの上に行き、ツインランスを降り下ろす。

「カハッ！」

地面にたたきつけられたラウラの肺から空気が漏れる。

「これが・・・前に進むための力だ！！」

唯はそう言うと同時に・・・

ドカーン！

両肩のGNドライブから煙が上がる。

「く・・・オーバーロード・・・！？まだ調整は完璧じゃなかったか・・・！」

「唯！」

そこにシャルルが駆けつける。

「やったね。だけど・・・。」

「あんだけ叩き込んだんだ・・・。絶対防御も発動しているみたいだからもうこちらの勝ちだ。だが問題は2回戦だよな・・・。」

勝利を確信し2回戦について話し合う2人。
だが・・・。

「ヒヒヒ。そろそろだなあ・・・。」

ラウラは考えていた。

尊敬する千冬の経歴に傷を入れた妹・・・一夏。

そして・・・今自分を倒した弟の唯。

教官に強さを証明できず目の前にいるこの男に負けるのか・・・？

（力が、欲しい・・・。）

その時ラウラの胸の奥底に何かが蠢いた。

『願うか・・・？ 汝、自らの変革を望むか・・・？ より強い力を欲するか・・・？』

そしてラウラはこう答えた。

（わたしに、比類なき最強を、唯一無二の絶対を———私によこせ！）

<VTシステム・・・起動・・・>

チャリチャリチャリン・・・！！

「・・・！？」

唯の目が紫に光りセルメダルの気配を感じラウラのほうを見る。

するとラウラのISシュヴァルツエア・レーゲンの装甲だったものがぐにやりと溶けラウラから溢れたセルメダルと結合、ドロドロとしたものになり、ラウラを包み込んでいった。

「チツ、ヤミーに寄生されていたか・・・！それにVTシステムが結合した・・・というところか・・・！」

唯は目の前にいる黒いウサギのヤミー・ヴァルキリーヤミーの持っている刀に目を見開いた・・・。

「雪片・・・！ふふ、ドイツめ、ずいぶんと楽しいものを作ったものだなあ・・・！ボーデヴィツヒには黙って拳句の果てには巧妙に隠してまで・・・！」

「・・・。」

シャルルには分かった。

唯はすごく怒っていることに。

「デュノア、避難してくれ。」

「分かった。でもあれを倒せるの？」

「俺にはあれを倒す為の力がある。だから心配するな。」

「絶対に帰ってきてね。負けたらメイクも追加だから。」

「ああ、わかった。」

シャルルは生徒を連れてアリーナを後にする。

唯は司令室に通信を開く。

「ねえさ・・・織斑教諭。ドイツを今すぐに拘束してくれ。絶対に逃がすな。」

「・・・分かった。だがあれはどうするつもりだ？」

「あれはヤミーだ。といってもVTシステムとセルメダルが結合して出来たものだな。」

「・・・ラウラを頼むぞ。唯。」

「・・・ああ。」

唯は通信を切り、ISを解除した後腰にオーズドライバーをセット。

それと同時に大量の屑ヤミーが現れ唯に襲い掛かる。

「・・・！屑まで！？」

「唯！」

愛琉が現れタトバのメダルを投げ渡す。

「はっ！」

屑ヤミーを蹴り飛ばしてメダルをキャッチ、ドライバーにセットしてスキャン。

「変身！」

（タカ！　トラ！　バツタ！）

（タ・ト・バ♪　タトバ♪　タ・ト・バ♪）

唯はオーズTTBに変身。

避難しながらそれを見ていた各国のIS関係者は驚く。

「何だあれは！？」

「ISとは違う・・・？」

オーズは専用剣・メダジャリバーを構えヴァルキリーヤミーに切りかかる。とする。

しかし屑ヤミーが邪魔で近づけずにいた。

「ハア！くそっ、キリが無い・・・！」

「お待たせ！」

「唯！大丈夫！？」

オーズは悪態をつく。

そこに鈴たちが現れ鈴はバースドライバーを巻きつける。

「さて、行きましょうか！」

ピン・・・！

鈴はセルメダルを上弾き左手でキャッチ。

「変身。」

そしてメダルをセットしてダイヤルを回す。

カポーン！

鈴の体がカプセル状のオーラに包まれ機械的な装甲を身につける。

これがセルメダルの力を極限にまで引き出す力を持ったライダー・・・
仮面ライダーバース。

「はああ・・・！」

愛琉も自身の本当の姿であるメズールに姿を変え屑ヤミーに攻撃を仕掛ける。

「一夏！箒！援護お願いね！」

「分かった！」

「・・・ああ！」

バースバスターを構え発射する一夏と箒。

「ナイス！てりゃ！」

バースバスターで怯んだところをキックやパンチを叩き込んでいく。

「ふっ！」

メズールは水流弾をメインにパンチとキックを当てていき数を減らしていく。

そしてオーズはヴァルキリーヤミーと激しく切り結んでいた。

「チィ！やっぱり元が姉さんというだけあって強い・・・」

「ふふ、私は最強だ！貴様とあの妹を殺しそして教官を連れ戻す！」

「そうかい、だがお前が強い訳じゃなく姉さんが強い・・・お前のように思いも信念も籠っていないただの模倣の剣で俺は倒せない！」

オーズはキックを当てて距離をとりタトバのメダル全てを外して新たにメダルをセットしてスキャン。

（ライオン！　ゴリラ！　チーター！）

オーズはラゴリーターにフォームチェンジ。

「姿を変えたぐらいで！」

「ふっ！オラァ！」

「グフッ！」

ヴァルキリーヤミーは雪片を振り下ろすがゴリバゴーンで受け止め、そのまま力の籠ったパンチを当てる。

「皆！目を閉じろ！」

オーズのその声を聞き、反射的に一夏たちが目をつぶる。

ピカー！！

ライオンヘッドの特殊能力・ライオネルフラッシャーを発動しヴァルキリーヤミーの動きを止める。

その隙を突き高速ダッシュでヴァルキリーヤミーの元にいき、組み付いてチーターレッグの特殊能力である連続キック・リボルスピンキックを繰り出す。

「・・・！いた！」

しばらくセルメダルを削っているとラウラがいた。

「手を伸ばせ！」

「・・・。」

オーズの言葉にラウラは手を伸ばして掴みオーズは一気に引っ張る。

「ぐおおお！貴様ぁ・・・！」

ラウラを引き抜いたオーズはいつの間にかタトバコンボに戻りヴァルキリーヤミーの攻撃をかわさず、そのまま攻撃を受ける。

「グッ！」

「どうしたの！？唯！」

一夏はバースバスターの銃口をヴァルキリーヤミーのほうに向ける

がバース（クレーンアーム・ドリルアーム装備）がストップを掛ける。

「一夏！よしなさい！」

「どうして止めるの！？鈴は平気なの！？」

「唯はね、決断をさせようとしているのよ。」

「え・・・？」

オーズはヴァルキリーヤミーの攻撃を全て受けている。
ラウラは不振に思い声をかける。

「どうした・・・！？早く倒せばいいだろう・・・！」

「ボーデヴィツヒ、あれはお前の欲望・・・。俺と一夏を殺したい欲望を持ったヤミーだ。お前は どうしたい・・・？」

「！？」

オーズは全く手を出さず、ヴァルキリーヤミーの攻撃を受け続ける。

「幻想にとらわれたまま生きるか・・・幻想を捨て、新しいラウラ・ボーデヴィツヒを始めるか・・・。決めるのは・・・お前だ・・・。」

「私は・・・。」

ラウラは羨ましかった。

鬼のような教導の中、嬉しそうに一夏と唯の話をする千冬。

千冬にこんな表情をさせる2人に嫉妬をしていたのだ・・・。

千冬が強いのは実力だけではなく、守るべきものがあつたからこそなのだとラウラは理解した。

「唯ー！頼むー！」

「・・・了解！ハァ！」

「ぐ・・・！分が悪いか・・・！」

ラウラの言葉を聴いたオーズはバツタレッグを発動し強烈なキックを叩き込む。

不利を悟ったヴァルキリーヤミーはアリーナの壁を破壊し外に逃げ出す。

「あ、待て！・・・あった！」

オーズは通路にある自販機を見つけ、黄色のカンドロイドを起動。

（トラカン！）

そして自販機に向かって投げ、ライドベンダーと合体、ラトラーター専用モンスターマシン・トライドベンダーになる。

コロコロ・・・。

ガシャンガシャン。

「ガオオン！！」

「合体した！？」

合体したことに一夏は驚く。

オーズはタカとバツタのメダルを外しライオンとチーターをセットしてスキャン。

（ライオン！　トラ！　チーター！）

（ラッタラッタ♪ラトラーター♪）

オーズの姿が全身黄色の姿に変わる。
これが風を司る猛獣の王者・ラトラーターコンボ。

「・・・！あれは黄色のコンボ！？」

「二人とも！目をつぶりなさい！」

「うおおおおお！！！！」

「暑い・・・！」

オーズが咆哮を上げるとライオネルフラッシュヤーが強化された熱光波・ライオディアスが全身から放たれ屑ヤミー数体は消し炭になる。

「鈴！愛琉！屑は任せる！」

「分かったわ！」

「ええ。」

ちなみにメズールはライオディアスを受けてなぜ平気なのかという
とシャチ、ウナギ、タコのメダル3枚は唯が持っており、現在メズ
ールの体を構築しているのはシャチ2枚、ウナギ1枚、タコ1枚。
代わりにライオンコア、チーターコアを取り込んでいるためライオ
ディアスに対抗できるようになっているのだ。

オーズLTTはトライドベンダーに搭乗、バースたちに屑を任せて
ヴァルキリーヤミーを追いかける。

「一気に決めるわよ！」

バースは2枚セルメダルをセットしてダイヤルを回す。

（セルバースト！）

「いっけー！」

クレーンアームに取り付けたドリルアームが光り輝き、バースはそれを振り回す。

必殺技・セルバーストを受け屑ヤミーを全て爆散。

BGM: Ride On Right Time (歌: 織斑唯&シヤルル・デュノア)

「ええい！しつこい！ハア！」
「つと！」

オーズLTTはヴァルキリーヤミーの放つ衝撃波を交わしつつ複合武器・メダガブリューを取り出す。
そしてセルメダルを食べさせる。

(ゴックン！)
(ラトラーター！　　ゝゝ♪)

コンボ名とメロディーが流れメダガブリューは黄色に輝く。

「ハァー・・・！」
「切り裂いてやる！」

トライドベンダーの前方に黄色のリングが出現してそこを猛スピードで潜り抜けスピードの乗ったアックスモードを叩き込む。

「せいやああー！！！」
「ぐわああ！！！」

必殺技・グランドオブレイジを受け、ヴァルキリーヤミーは爆散、

その場には大破したシュバルツェア・レーゲンが残りオーズはそれを回収してIS学園に帰っていった。
それを影で見っていた男がいた。

「くそ！IS学園って言ったら女の園じゃないか！なのにハーレムのような生活を満喫している織斑唯とかいうやつ・・・許せん！」

この男は伊藤誠。

彼女がいるというのに平気で他の女を抱くという男の風上にも置けない男だ。

この男は一体何をするというのだろうか・・・？

風を司る猛獣の王者（後書き）

紫の力はある程度使いこなしています。

さらに一夏たちを守りたいという欲望があるのでそれが抑止力になって押さえつけて自分の力にしています。

最もギリギリのラインを保っているのですが・・・。

紫の存在と危険性を知っているのは愛琉、束、鈴だけです。

お気に入り100件に到達しました。（といってもまた減ったりしていましたか・・・。）

それに伴い今の話が落ち着いたら外伝を書こうと思います！

ちなみに一夏のイメージC Vは桑島法子さん。

唯は・・・誰だろうか？

長編予告（前書き）

あるゲームとのクロスです。

ちゃんと書けるか不安です・・・。

今回ジャンクションはお休みです。

長編予告

夏休み・・・。

唯たちはある男たちの戦いに巻き込まれる・・・。
一夏たちを引き連れ神室町へやって来た唯。

「秋山さん、久しぶり。」

一夏を引き連れ孤高の金融屋・秋山駿と再会、そこで事件に巻き込まれてしまう。

「何・・・？これ・・・？」

「まさか生きているうちに生でゾンビを拝む日が来るとはな・・・！」

神室町にゾンビが大量発生。

「秋山さん、ここは俺が！早く柄本先生を！」

その影響は別々に行動していた筈たちにも牙を向く・・・。

「何だこいつらは！？」

「いや！来ないで！」

神室町と筈たちに迫る危機・・・。
そこに3人の男たちが駆けつける。

「大丈夫か？嬢ちゃん？」

「無事か？」

「大丈夫か？」

箒たちは男たちに守られながら唯と一夏との再会を果たす。
ゾンビ騒動の裏に唯に関する衝撃の秘密が隠されていた。

「お前はすでに死んでいるのさ。」

「え・・・？」

唯は覚悟を決め事件の黒幕と対峙する！

「俺は・・・人として生きる！俺は人間だ！！」

その言葉と共に引き金を引く唯。

唯たちは悪夢の神室町から生還できるのか・・・。

I S ～ インフィニット・ストラトス ～ O F T H E E N D

執筆予定！

「後悔なく精一杯生きて最後に死ぬ時にこう言うのさ。・・・生きていて良かったってな。」

長編予告（後書き）

記念短編も頑張ります。

しかしPSSでの執筆はしんどい・・・。

唯の使う固有武器は決まっています。

シャルロット・デュノア（前書き）

グダグダです。

ですがお気に入り100件突破です！

IS・・

後ろを向いている唯と泣きながら背中に抱きつくシャルロット。
振り向く唯、シャルロットを抱きしめる。

この後すぐ・・！

シャルロット・デュノア

唯は教師陣からオーズのことを聞かれ、ある程度はぐらかしながらも受け答えを行った。

鈴も同様にはぐらかしながらも受け答えを行った。
解放されたのは昼過ぎだった。

食堂

唯たちは昼食のため、ここに来ていた。

「トーナメントは中止だってさ。」

「ま、そうだろうな。」

「でもデータ取りのために一回戦は全て行うみたいだよ。」

「ガオッ。」

（あの場にいたのは卑怯者か・・・？）

唯、シャルルはこんな会話を交わしながら昼食をとっていた。

ちなみにシャルルの肩にはトラカンが乗っている。

シャルルが欲しいといってきたので唯がちよいっと改造を施し、ライドベンダーとの合体機能と巨大化機能をなくした代わりにソーラー発電システムを組み込んだ。

実質ハイブリッドメカペットのようなものだ。

そこに山田先生が入ってくる。

「織斑くん、デュノアくん。お疲れ様でした。」

「いえ、どうも。」

「それで教諭、何のようだ？」

「あ、そうでした。なんと今日から男子の大浴場が使用解禁になり

ました！」

「そうですか。わざわざそれを言いには？」

「はい。あ、これ鍵です。」

唯は鍵を受け取り要件を済ませた山田先生は去っていった。

保健室

「。。。。」

ラウラは目を覚ました。

横を見ると千冬の姿があった。

「あの怪物はいったい・・・？」

「私も詳しいことはよくわからないが、織斑弟が言うにはヤミーという怪物だそうだ。」

「ヤミー・・・」

「ボーデヴィツヒの欲望が形になった怪物・・・とでもいっておこうか。あとは融合したお前のISにVTシステムが搭載されていた。巧妙に隠していたみたいだがな。」

「・・・研究や製造、搭載が禁止されているあのシステムが・・・？」

ラウラは顔を下に向ける。

「私が・・・望んだからなのですね・・・。あなたのようになりたいと・・・。」

「ラウラ・ボーデヴィツヒ！！」

「は、はいっ！！」

千冬に大声で呼ばれラウラの声が張りあがる。

「お前は誰だ？」

「え、わ、私は・・・。」

「それでいい。織斑弟も言っていた。幻想を捨て、新しいラウラ・ボーデヴィツヒを今から始めろ。」

そういう残し千冬は保健室を後にする。

入れ替わる形で唯が入ってくる。

「大丈夫か？」

「・・・ああ。」

しばらく沈黙が続く。

先に口を開いたのはラウラだった。

「なぜ、お前は強いのだ？」

「・・・俺は強くなかない。」

「うそだ。あの怪物を倒したのはお前だと聞いた！なのになぜ・・・！？」

「俺は自分のできることをやっているだけだ。」

唯はラウラに顔を近づける。

近くで唯の顔を見たラウラはドキッとする。

「手を伸ばさなかったら後悔する・・・。俺はそれがいやだから手を伸ばす・・・ただそれだけだ。」

そう言って唯は保健室を後にする。

夜・大浴場

カポーン・・・。

「ふうゝ・・・。」

唯は一人で風呂に入っていた。

シャルルが遠慮したのか部屋のシャワーで済ませるといったのだ。

「こんなにゆったりと風呂に入ったのはいつ振りだ・・・。仕事先ではシャワーとかが当たり前だったからな・・・。」

体を伸ばしながらしみじみと振り返っていると・・・。

カラカラカラ・・・。

「え？」

扉が開く音が聞こえ、振り向くとそこにはバスタオル一枚で体を隠したシャルルの姿があった。

「お、お邪魔します・・・。」

「デ、デュノア・・・！」

「あ、あんまり見ないで・・・。」

「す、すまない！」

唯はすぐに目を瞑って右に回る。

「デュノア、どういいうつもりだ？ 入らないって言ってたはずなのに・・・。」

「ぼ、僕が一緒だと、イヤ・・・？」

「・・・好きにしろ。」

「・・・ありがとう。来たのはね、大事な話があるからなんだ。だから、唯にも聞いて欲しい・・・。」

「・・・話してみろ。」

意を決したシャルルが話し始め、唯は目を閉じたまま話を聞く。

「そ、その・・・前に話したこと、なんだけど・・・。」

「学園に残るか・・・という話か？」

「う、うん。僕ね、ここにしようと思う。僕はまだここだって居場所を見つけられてないし、それにね・・・。」

「それに・・・？」

ちやぷ・・・。

湯船の中を動く音が聞こえる、そして唯の背中にシャルルが触れた・・・。

「デュノア！？そ、それは・・・！？」

背中に触れた手を滑らせて唯を抱きしめた。

背中にシャルルが密着していて、唯の心臓はさらに鼓動を早くする。

「・・・唯が、ここにいればいいって言ってくれたから。そんな唯がいるから、僕はここにいたいと思えるんだよ。」

「・・・俺は何もしていない。その決断をしたのはお前自身だ。」

「ううん、そんなことない。」

シャルルからは見えないが顔を真っ赤にしながら唯は答える。

「それに、ね。もうひとつ決めたんだ。」

「何がだ？デユノ」

「シャルロット。」

「あ？」

「これからはシャルロットって呼んでほしいな、唯。」

「シャルロット・・・。本当の名前を呼んでもいいのか？」

「うん、僕の名前。お母さんがくれた、本当の名前。」

「そこまでの覚悟があるのなら俺も答えなくちな。シャルロット。」

「うん。」

シャルロットの声が聞こえる。

顔は見えないけどきつと彼女の顔は笑顔だろう。

翌日

シャルルはホームルームに現れなかった。

今朝からチラチラと唯を見ているだけだ。

「み、みなさん、おはようございます・・・。」

（なんか・・・えらいやつれてるな。）

山田先生が教室に入ってきた。

とてもやつれているように見える。

「えーと、今日はですね・・・。みなさんに転校生を紹介します。転校生といえますか、すでに紹介はすんでいるといえますか、ええと・・・。」

（どういことかな？）

（転校生・・・？）

山田先生の言葉に唯とユリは脳内会議を行うが答えは出なかった。

「じゃあ、入ってください。」

「失礼します。」

ドアが開き、入ってきたのは・・・。

「シャルロット・デュノアです。皆さん、改めてよろしく願います。」

スカート姿のシャルロットだった。

シャルロットはぺこりと一礼をするとクラスの全員がぽかんとしながら頭を下げ返す。

「ええと、デュノアくんはデュノアさんでした。ということです。

はぁ・・・、また寮の部屋割りを組み立て直す作業がはじまります・・・。」

（教諭、ドンマイ。）

唯が心の中で同情するが大事なことを忘れていた。

そう、ここはIS学園。

女子の巣靴であり姉と幼馴染がいるクラス。

「唯・・・。OHANASHIしたいんだけど・・・。」

「うむ、一夏の言うとおりで・・・。」

「・・・。」

いつの間にかヤンデレモードの一夏は雪片を展開、同じくヤンデレモードの箒も近接ブレードが握られていた。

離れた場所ではセシリアもスターライトを構えていた。

「「天誅^{ですわ}!!」」

二人は唯めがけて振り下ろしレーザーが放たれる。
しかし・・・。

ガキン!!

唯の前に立っていたのはシュバルツェア・レーゲンを展開したラウラだった。

まだ修復が終わっていないらしくレールキャノンがない。

「ボーデヴィツヒ・・・。」

「・・・。」

グイツ

ラウラは唯の胸倉をつかみ・・・。

「え・・・？ ムグウ!？」

ジュル・・・ピチュ・・・ジュルル・・・。

深いほうのキスをかまされた。

それを見ていたクラスメイトは顔を真っ赤にする。

ラウラが離れたとき、二人の間には銀色の橋ができていた。

「お、お前を私の嫁にする!これは決定事項だ!」

「はぁ、はぁ。よ、嫁・・・？ 婿じゃないのか・・・？・・・ハッ!？」

顔を真っ赤にするラウラに突っ込みを入れた唯が殺気に気づき振り向くと般若が4人いた。

「へ、変身！」

（ライオン！　ウナギ！　バッタ！）

さすがに身の危険を感じた唯はオーズ・ラウバに変身。

「すまん！」

ピカー！！

「キャ！？」

ライオネルフラッシャーを発動し窓から逃げる。

そこから壮絶な鬼ごっこが展開され、終わったのは昼前だった。昼にそのことを鈴に話すと・・・。

「はぁ・・・、またなの？」

「何で俺はこんなに好かれるんだろうな・・・。」

「「はぁ・・・。」」

二人のため息は風とともに消えた。

シャルロット・デュノア（後書き）

次から第三章の予定

夢とユリの正体と紅椿（前書き）

小説のタイトルが載っていますが、掲載の許可を得ています。

あるキャラに対してアンチ分があるので読み方はそれを覚悟の上で呼んでください。

IS・

唯、晴れた空を見つめる。

その空でオーズ・タトバコンボがメダジャリバーを構える。

この後すぐ・・・！

夢とユリの正体と紅椿

「ゴメンね、わざわざ手伝ってもらって。」

「気にすんな。今日は予定がなかったからちようどよかった。」

地平線に沈んだ夕陽が赤い光を射し込む廊下、唯とシャルロットは
今月の学校行事である臨海学校の詳細について書かれたプリントを
持っている。

「やることなかったって・・・今日はセシリア達と街に行くんじゃない
なかったの？」

「・・・お前がいなきゃどこに行ってもつまらない。」

「ふえ？」

唯はそっぽを向きながら小声で言った。

シャルロットは唯が言ったことにまぬけな声で答える。

「それとも・・・俺と一緒にだと迷惑だったか・・・？」

そう言いながら、唯はいつものようにシャルロットの頭を撫でる。

その頬が若干赤く見えるのは、窓から射し込んだ夕日の所為だけでも
無さそうだ。

「ううん、僕は唯と一緒にいるだけで幸せだよ・・・僕・・・唯が好
き・・・。」

「俺も・・・シャルロットのことが好きだ・・・。」

廊下で見つめ合う二人。

時と場所を考えろと言いたいが、恋する男女にそんな事を言うのは

無粋以外の何ものでもない。
唯は撫でている手をシャルロットの腰に回し、ゆっくりと引き寄せ・
・。

「あ・・れ・・?」

ぼーっとした頭をフル回転させながら、シャルロットは現状を把握する。

現在は朝の六時半、間違っても廊下に夕陽なんて射し込んでいない。

加えてここは廊下ですらない。

一年寮の自室だ。

つまり・・。

「夢・・。」

シャルロットは上半身を起こしながら深く、深くため息を吐く。

(ああ、せめてもう十秒くらい見れてれば・・。)

名残惜しさ故か、シャルロットは先程まで見ていた夢を脳内シアターでリプレイした。

数秒ほどして、顔が爆発したように赤くなる。

(学校、それも廊下でやるなんて・・。)

胸に手を当ててみれば分かる。

心臓が機関銃の如く鼓動を乱射していることが。でもよくよく考えてみると。

（唯からキスしてくるなんて有り得ないね・・・。）

一気に鼓動が収まった。

はぁ、とまたもや深いため息を吐きつつ隣りのベットを見ると、そこにはルームメイトの姿が無かった。

余談だが女子と言うことが発覚したので、シャルロットと唯は別々の部屋になっている。

「ま、いっか・・・。」

こんな早朝からいないルームメイトのことも気になるが、シャルロットの脳内においての優先順位は今すぐに二度寝をして、夢の続きを見ることだ。

夢の続きが見れますように、と心の中でお願いしながら、シャルロットはシーツを被って横になる。

（でも、どうせ夢ならもうちょっとエッチイのでもいいのに・・・。）

またしてもシャルロットは顔を爆発させた。

鼓動を収めるのが一苦労だったのは言うまでもない。

（そう言えば・・・。）

ふと思う。

「唯は今どんな夢を見てるんだろう・・・？」

唯が目を覚ますとそこは真っ暗の空間。

「どこだここ・・・？」

「ここは唯の夢だよ♪」

唯は声のした方を振り向くとそこにいたのは・・・。

「え・・・？俺・・・？」

唯と瓜二つの姿をした人間だった。

唯と違うのは女性特有の体つきをしており、箒や一夏以上に出るところは出ており髪が紫色のロングをツインテールにしている。

「髪が紫・・・？それにお前は女なのか・・・？」

「そうだよ？」

そう言って少女はクスクスと笑う。

唯は目の前の少女を睨みながら聞く。

「お前・・・誰だ・・・？」

「やだなあゝ、僕だよ。君がユリって呼んでいる存在。」

「な・・・！？」

唯は目の前の人物・・・ユリに驚く。

ユリは妖艶な笑みを浮かべながら唯に近づき胸を指でなぞる。

「僕の正体はね・・・あの紫のコアメダルなんだ♪で、グリードとしての名前はギル。」

「何・・・!?」

唯はさらに驚いた。

ユリの正体がグリードであることに。

「今はそんなに警戒しなくてもいいよ♪僕はね、無の欲望から生まれたコアメダル。僕は今全力を出せないんだ。つまり、唯がいつちゃんやほーちゃんを守りたいという欲望で僕を押さえつけているんだ♪」

「・・・何が言いたい?」

唯の問いにユリは妖艶な笑みを浮かべグリードの姿に変わり唯の耳に近づき小声でささやくように言う。

「早く僕を追い出す方法を見つけないと僕が君の体を支配する・・・
と言っておこうかな♪」

その言葉と同時に唯の目が覚める。

「・・・夢か。」

暗闇が薄れて視界が晴れると、そこにはここ最近で見慣れ始めた天井があった。

唯は妙にスッキリしてしまった頭でさっきまで見ていた夢のことを考える。

「まさかユリの正体がグリードだったなんてな・・・。。。。。。考えても

仕方ないことか。」

ふうとため息を吐きながら起き上がろうとする。

「ん．．。」

「は？」

この部屋にいるはずのない、自分以外の声が聞こえた。

「誰だ．．？」

恐る恐る、且つ慎重に布団に手をかけ．．．一気にめくる！！
そこにいたのは．．．

「やっぱりお前かラウラ．．。」

ドイツの代表候補生、ラウラ・ボーデヴィツヒその人だ。

転校初日から一夏の頬を張ろうとし、その一撃を止めたのがそもそもの始まり。クラス対抗戦後色々．．色々とありすぎた。
取り敢ず、目下の問題は．．。

「何で裸なんだよ．．。」

ラウラが裸で寝ているという点だ。

身につけている物を上げるとすれば、左目を覆う眼帯と待機状態の
ISである、右脚のレッグバンドのみ。

「ん、何だ朝か。唯、おはよう。」

何か慌てるでもなく、普通にラウラは朝の挨拶をしてくる。

その凶太さに一種の感銘を受けながら、唯は言う。

「ああ、おはよう。ラウラ。何だってお前は俺のベットに、しかも裸で寝ている？」

「夫婦とは何も包み隠さぬものだと聞いたぞ。それに、こういう起こし方は将来結ばれる者同士の定番だとも。」

「まず第一に俺とお前は夫婦じゃない。次に将来結ばれる者同士でもない。さらにそんな間違った知識をお前に吹き込んだのはこのバカ野郎だつて俺は何処から突っ込めばいいんだコンチクショー！」

唯はほとんどやけくそ気味になりながら叫ぶ。

普段は愛琉や束のツツコミを担当していてツツコミには慣れているはずなのだが一度にたくさんツツコミポイントが多すぎる会話のためオーバーヒートを起こしたようだ。

その後、朝食に誘いに来た一夏たちが現れ更なる一悶着を起こしたのは完全な余談である。

食堂

「ふう……。」

「でも唯って朝からよく食べるよね。それでいて太らないんだもん。ウラヤマシイ……。」

唯は朝食を食べ終え、食後のお茶をすすっていると一夏がそんな会話を持ち出した。

最後らへんに黒い何かを感じたが気のせいだと言いたい。

ちなみに唯が食べたのは和風の焼き魚定食でご飯を3杯。

「ここの飯がうまいっていうのもあるけど、どうも俺腹持ちが長続

きしくいらしいんだわ。」

「でも太らないよね？」

「うーん、どうなんだろうな？」

「わああっ・・・！遅刻、遅刻しちゃう！」

非常に珍しい声が食堂に響いた。

声の主は慌ただしく食堂に駆け込み、予め作り置きされていた定食を手にとって空いている席、唯の左隣に座る。

「おはようさん、シャルロット。」

「あ、唯。お早う」

シャルロットに挨拶をしてから、唯は食堂の時計に目を向けた。

「じゃあ私たち先に行くね。」

「了解。」

一夏たちは先に食堂を後にする。

今からでは相当急いで食べなければ授業に間に合わない。

まあシャルロットがこんなギリギリの時間で食堂に来ることが珍しいことなのだが。

「随分遅かったみたいだが何かあったのか？」

「う、うん。ちょっと二度寝しちゃって・・・。」

「へえ、珍しいな。」

意外そうに唯が頷いたその時、無情にも朝のSHRの予鈴が鳴り響いた。

「うわわわわっ！本当に遅刻しちゃうって！」

まあ、今日の朝のSHRは千冬がやることになっているので、仕方ないと言えば仕方ないのだが・・・。
チャームがなって更に慌てたシャルロットは急いでご飯を掻き込んだ。急ぎすぎて、当然喉に詰まる。

「何やってんだよお前は・・・ほら。」

唯一人、食堂に残ってシャルロットを待っている唯は呆れたようにため息を吐きながら、シャルロットにコップを渡してその背中をさすってやった。

「・・・あ、ありがとう・・・。って、唯！急がなきゃ！」

「そいつもそうだと！・・・変身！」

（タカ！　トラ！　チーター！）

唯はオーズ・タカトラーターに変身、シャルロットを抱える。

「シャルロット、口を閉じろよ！」

「う、うん・・・ってわひゃあ！」

シャルロットを抱えたオーズは食堂を飛び出していった。

高速ダッシュで昇降口にたどり着き上履きをとった後再び高速ダッシュで駆け抜ける。

「だらっしやあ！！！」

聞いている人が？を浮かべる言葉を吐いた後ドアを勢いよく開ける。

「け、結果は!？」

唯は変身を解きつつ教壇の上に立っている千冬に問いかけた。
腕組みをしていた千冬はため息を吐き、親指で教室の壁に備え付けられた時計を示す。

「五秒前だがこんなことでオーズの力を使うな、バカ者。」

出席名簿が二つの快音を響かせたのは言うまでもない・・・。

その日の放課後、今度の日曜日に臨海学校用に必要なものを買いにいく約束をした。

掃除を済ませた後、簪にブルーフレームセカンドを渡しフィッテングと第一形態移行の手伝い、その後は軽い模擬戦を行った。

だが簪がブルーフレームを受け取ったことを快く思わないものがあった。

「簪ちゃん・・・。」

「妹を守るのは自分だけでいい、その欲望、解放しろ。」
「え?」

チャリン

男の声が聞こえ、何かを投入されたと同時にその女子生徒・更識楯無は倒れ気絶。

生まれたのは合成ヤミー・カメレオンキツネヤミーだ。

「マモルノハ・・・ワタシダケデイイ・・・。」

そう言ってカメレオンキツネヤミーは姿をくらませる。

日曜日・食堂前

唯はシャルロットを待っていた。

今日のファッションは紺色のジーンズに白のTシャツとシンプルだ。余談だが土曜日に散髪に行き、今の唯の髪型はショートにチェンジ。女の子っぽい唯の顔立ちとショートの髪型が合わさると活発系の少女が思い浮かぶ。

P r r r

「ん？」

唯の携帯が鳴り、電話に出る。

「はい。」

『唯か、久しぶりだな。』

「おお、ダブルの左側じゃないか。」

電話の相手は風都に住んでいる探偵で仮面ライダーだ。

『その呼び方はやめろって。』

「ハハ、冗談だ。で、何のようだ？ 準一？」

『ああ、俺たちがミュージアムを倒したのは知っているだろう？』

「そうだな。」

『で、ミュージアムの後継者を名乗ってガイアメモリをばら撒いているグループが現れてな・・・』

電話の相手・長瀬準一は探偵でありながらガイアメモリを使用した怪人・ドーパントを倒す仮面ライダーWとしての顔を持っている。話の要約はこうだ。

最近ミュージアムの後継者を名乗り、ガイアメモリをばら撒いているグループが存在しているらしい。

「あゝ。なるほどな。わかった。こっち側にドーパントが現れたらブレイクしておく。」

『悪いな。』

「ライダーは助け合いだろ？」

『そうだったな。』

「光一郎にもよろしく言っておいてくれ。」

『わかった。』

唯は通話ボタンをきる。

（ドーパントか……。現れたらメモリブレイクしなくちゃな……。）

周囲を見渡すとシャルロットが向こう側から走ってやってくる。

「唯々待った？」

「いや、じゃあ行こうか。」

そう言って唯は自販機の前に立ちセルメダルを投入、ボタンを押す。

ガシャン！

「相変わらずすごいね。」

「まあなにも知らない人が見たらただの自販機だからな。・・・ほれ。」

「ありがとう。」

ライドベンダー・ビークルモードに変形、シャルロットにヘルメツ

トを渡す。

受け取ったシャルロットは唯の腰に手を回し唯はバイクをスタート。
その姿を一夏とセシリアは見ていた。

同じ頃・箒の部屋

（私にも・専用機を……。専用機があれば・唯の隣で戦える・・
！）

唯の隣で戦いたい・・その思いで箒はある人物に電話をする。

同時刻・学園内・篠ノ乃研究所

束と愛琉の目の前には白と青で翼が特徴的なISがあった。

「うむむむ……。束さん名義で引き取ってゆいにゃんとともに作っ
たはいいけど……。」

「束、これはここの学生じゃ扱えないと思うわよ。」
「だよね……。」

束は目の前の打鉄式式だったものを見つめ、ガツクリと肩を落とす。
単機でIS数機を相手にでき、かつ殲滅するというコンセプトの元、
唯ともに作った結果、複雑な操作が必要となってしまう一部の人し
か扱えない品物となってしまった。

まあそのおかげでビーム兵器理論と天候に左右されない兵器の開発
スキルを身につけたわけだが・・。
とそのとき・・。

♪♪♪♪♪（暴れん坊將軍のテーマ）

「こ、この着信音は！」

聞くことのなかった着信音を聞き、束のテンションがアップ。
愛琉が束の携帯を渡す。

「はい。」

「ありがと、いるちゃん。・・あゝもすもすひねもす。みんなの
アイドル、束さんだよ♪」

『姉さん・・。』

「うんうん、わかってるよ。箒ちゃんだけの専用機が欲しいんで
しょ？自分だけの、ただひとつだけの専用機が！もちろん、用意し
ているよ♪闇に咲き誇る一輪の花・・その名は紅椿！」

『姉さん・・！』

箒はまさに自身が望んだ展開に心躍る。

だがそれも次の束の言葉で打ち砕かれる。

「でも今の箒ちゃんにこれは渡せないかな。」

『え・・？』

箒は自分の耳を疑った。

あのシスコンともいえる姉が自分が初めてともいえるおねだりを拒
否した？

『ど、どうしてですか・・？』

「箒ちゃん、お姉ちゃんである束さんに言えば簡単に専用機が手に
入ると思った？それは大きく間違ってるよ。」

『どういことですか！？』

「ゆいちゃんに聞けばわかるよ。束さんにいえることは今の箒ちゃん
には努力も覚悟も信念も何もない。これぐらいだよ。」

『……』

もはや何を言えはいわからない箒をよそに束は会話を進める。

「まあ、一応臨海学校のとくに持って行くけど自分自身の答えが出せたらゆいにゃんに言っただね。」

そう言って束は電話を切り愛琉に渡す。

「箒から？」

「うん、まさにゆいにゃんの言っていたタイミングだったね。」

そう、唯は束に箒から近々電話が来るといって紅椿を渡さないように言っておいたのだ。

「以前の束さんだったら間違いなく渡していたね。でもここに来ていろんな人と触れ合ってた。努力して上を目指してるんだな。」

「そうね、だけど箒は努力している生徒を踏みにじってIS開発者・篠ノ乃束の妹という肩書きを利用して楽に専用機を手に入れようと考えた……。ただ唯の隣で戦いたいという自分勝手なエゴで……」

「箒ちゃんは気づいてないけど紅椿のコアはノーナンバー。世界がこのことを知ったとき、戦えるのかといわれたら答えはNO。信念も何もない状態で戦えば必ず誰かが死ぬ。死ぬことはなくても重傷を負わせてしまう。」

愛琉は携帯を開き、小説サイト内のある小説のページを開く。

「Twin SEED Return's……。今の箒はまさにカガリやアスランが当てはまるわね。」

「うん。ゆいにゃんに進められて読んだけど・・・考えさせられることは多いね・・・」

同じころ、箒は呆然としていた。

「・・・。」

箒は知らないが束はヤミーに寄生された。

その後考えを改め多くの人と触れあい人と触れ合う大切さを思い出したのだ。

同時に力の意味というものを理解できた。

「・・・。」

箒は未だに呆然となりながら手に持った携帯を見つめるのだった・・・。

夢とユリの正体と紅椿（後書き）

唯にサブストーリーが発生しました。

なんとか訓練校を受ける方向で収まりました。

だけど就活は続けていきます。

お気に入り100件記念・・・何にしようか・・・
（今更？）

ロケットライダー（前書き）

あのロケットライダーの小話です。

設定についてのツツコミは受付ません。

頭に閃いたのがこれだったから。

IS・・・。

マッシュグラードで走り抜けるフォーゼ。

並走するパワーダイザー・ビーグルモード。

このあとすぐ・・・！

ロケットライダー

変態大橋、ちゃんとした橋の名はあるのだがこの橋どういうわけか普通じゃない人たちで溢れかえっている。
例えば・・・。

「幼女は触れるものじゃねえ、愛でるもんだ。」

ロリコンの極致に到ったハゲがいたり・・・。

「あ、ちようちよう。」

頭のねじが抜けまくってそうな白髪の少女がいたり・・・。

「フハハハハ！おはよう、庶民！」

金ピカの人力車で登校する御曹司（と書いてバカ）がいたり・・・。

「素敵です！英雄様！」

その人力車を自動車並みの速度でひくメイドがいたりするからだ。

川神学園

いつも通りに登校する風間ファミリー。
その中に彼女はいた。

「スバルちゃん、おはよう。」

「おはよー。」

まっながすばる
松永昂

川神四天王の一人・松永燕の妹で自身はスピードスターの異名を持ち、学園全員と友達になる夢を持つ少女。

得物は素手（中でも受け流しからのカウンターが得意）と棒術。

「スバル、おはよう！」

「おはよう、お姉ちゃん。」

姉の燕と挨拶を交わす。

風間ファミリーにはもう一つの顔があった。

「スバル！ゾディアーツだ！いつも通り指示はこっちで出す！」

「わかった！行くよ！」

そういつて昂はベルトのスイッチを右から順に一つずつ入れていく。

3・・

スイッチを全部入れると、続いてベルトからカウントが始まった。
徐々に手を胸の辺りに近づけていく。

2・・

1・・

グッ・・

昂はベルトについているレバーを力強く握る。

「変身!!」

その叫びと共に昴は勢いよくレバーを入れ、腕を天に突き上げた。すると彼女の体を白い光が包み込まれる。

同時にロケットの発射の時の様な激しい噴射が辺りに巻き起こる。煙が晴れるとそこにいたのはロケットのような頭と宇宙飛行士のような体をした仮面ライダーがいた。

「宇宙来たーーーーー!!」

昴のもう一つの顔・・・それが仮面ライダーフォーゼ。

武神、川神百代

フォーゼドライバーとアストロスイッチの持ち主であり軍師の直江大和

大和にべた惚れ、椎名京

女の子大好きなタフガイでパワーダイザー担当、島津岳人

仲間内での常識人兼良心兼ツッコミ兼情報収集担当、師岡卓也

努力する元気っ娘、川神一子

騎士道を重んじるドイツ人、クリステイアーネ・フリードリヒ

自由きままなリーダー兼部長、風間翔一

人は彼らのことをこう呼ぶ、風間ファミリーと。

そしてもう一つの名前が学園非公式の部活・仮面ライダー部。
フォーゼは右の拳を前に付きだし・・・。

「タイマン張らせてもらおうよ!!」

今日も元気に仮面ライダー部は活動中!!

だが彼らは知らない。

欲望の王との共闘が近づいていることを・・・。

ロケットライダー（後書き）

というわけでマジ恋です。

昴の容姿は姉とあまり変わらず区別をつけるために赤の髪飾りを着けています。

そんな彼女の恋愛事情は・・・。

京↓大和↓昴↑百代、クリス

と言った具合ですね。

そんな昴のイメージC Vは高山みなみさん。

言っておきますがメインはISです。

メインはISです。

大事な事なので二回言いました。

川神大戦は夏休み最後の思い出として書こうかと思っています。

百代はマスカレードドーパント、クズヤミー程度なら相手にできます。

さすがに怪人相手ではきついでしょうから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4718t/>

IS～インフィニット・ストラトス～ 壊すものと守るもの

2011年11月4日03時06分発行